平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業
実践報告書

母語教育支援センター校等連絡会

平成 21 年(２００９年)３月

目　次

はじめに　1

１　新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援について
(1) 新渡日の外国人児童生徒の状況　2
(2) 新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業
(3) 成果
(4) 課題　3

２　実践事例
(1) 神戸市立本庄小学校（スペイン語）　4
(2) 神戸市立本山第二小学校（フィリピノ語）　6
(3) 神戸市立こうべ小学校（中国語）　8
(4) 神戸市立港島小学校（中国語）　10
(5) 神戸市立御蔵小学校（ベトナム語）　12
(6) 神戸市立真陽小学校（ベトナム語）　14
(7) 神戸市立神陵台小学校（中国語）　16
(8) 尼崎市立園田北小学校（ベトナム語）　18
(9) 西宮市立神原小学校（インドネシア語）　20
(10) 芦屋市立潮見小学校（スペイン語）　22
(11) 伊丹市立花里小学校（韓国・朝鮮語）　24
(12) 小野市立河合小学校（ポルトガル語）　26
(13) 姫路市立東小学校（ベトナム語）　28
(14) 姫路市立城東小学校（ベトナム語）　30
(15) 姫路市立花田小学校（ベトナム語）　32
(16) 姫路市立東光中学校（ベトナム語）　34
(17) 姫路市立花田中学校（ベトナム語）　36

参考資料

＜論文１＞
外国人児童生徒への母語教育支援の重要性について　38
－兵庫県の母語教育支援事業に関わって－
大阪大学世界言語センター　准教授　真嶋潤子
＜論文２＞
母語教室の運営のあり方について― 実践から見えてきたこと ―　44
京都大学国際交流センター　非常勤講師　櫻井千穂
実施要項　49
平成 20 年度母語教育支援センター校一覧　50

はじめに

　世界は今、政治や経済、文化をはじめあらゆる分野における活動が地球規模で展開され、国や地域を越えた交流が行われています。このようなグローバル化が進行する中で、兵庫県の外国人登録者数は、阪神・淡路大震災が起きた平成７年(1995 年)12 月末には、97,542 人と減少しましたが、その後回復し、平成 20 年(2008)年 12 月末には、101,773 人となりました。そのうち、約 5.4 万人が韓国・朝鮮人、約 2.5 万人が中国人となっています。また、近年は、就労や留学などでアジアや中南米諸国からの人々が増加しており、特に中国人、ベトナム人、フィリピン人の増加率が高くなっています。

　県教育委員会においては、「人権教育基本方針」「外国人児童生徒にかかわる教育指針」を踏まえ、外国人児童生徒の自己実現を支援するとともに、すべての児童生徒に「豊かに共生する心」をはぐくむ子ども多文化共生教育を推進しています。

　また、平成 15 年(2003 年)には、県立国際高等学校内に子ども多文化共生センターを開設し、センターを中心に学校や NGO/NPO 等関係機関・団体等とネットワークを構築しながら、教育相談や研修、イベント等の情報提供、学習教材等の展示、貸出、子ども多文化共生をめざす交流活動など様々な取組を行っています。

　平成 18 年度より３年間、新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業を実施し、母語を思考基盤とする新渡日の外国人児童生徒の学習言語の習得を支援するとともに、母語・母文化にふれる様々な体験をとおして、アイデンティティの確立を支援してきました。その中で、母語教育支援センター校を指定し、日本語の習得の基礎となる母語の指導や母文化についての理解を深める取組を行ってきました。

　その実践事例をとりまとめ、『平成 20 年度新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践報告書』を作成しました。報告書の前半には、母語教育支援センター校での実践事例を掲載しています。後半には、専門的見地から母語教育支援の理論的や技能に関する論文（母語教育支援センター校等連絡会での講義内容をまとめたもの）を掲載しています。

　今後、この実践報告書が広く県内の学校で活用され、子ども多文化共生教育とりわけ母語教育支援事業が充実することを願っています。

　最後になりましたが、この実践報告書を作成するにあたり、支援のあり方等について特別にご寄稿いただきました大阪大学世界言語研究センター准教授　真嶋潤子様、京都大学国際交流センター非常勤講師　櫻井千穂様、また貴重な実践事例を報告いただいた母語教育支援センター校の方々に心からお礼申し上げます。

平成 21 年(2009 年)３月

兵庫県教育委員会事務局
人権教育課長　細川　明子

1　新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援について

(1) 新渡日の外国人児童生徒の状況

県内の公立学校に在籍する外国人児童生徒数は、平成 20 年５月１日の学校基本調査によると、4,359 人であり、近年の少子化を反映し、減少傾向にある。その中で、日本語指導が必要な外国人児童生徒は、平成 20 年９月１日文部科学省調査によると、218 校に 702 人が在籍している。近年、児童生徒数は減少傾向にあったが、平成 20 年は前年と比べて 68 名の増加となっている。

新渡日の外国人児童生徒は、母国と日本との文化や生活習慣の違いなどが起因となって、疎外感を感じたり、自尊感情が十分はぐくまれていなかったり、また、いじめを受けたりして学校へ行けなくなり、不登校や長期欠席となったりするという問題が生じている。また、日本語理解が不十分なことから、日本語で行われる授業内容が理解できず、学力が十分ついていないという問題も生じている。

(2) 新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業

新渡日の外国人児童生徒の学校生活への適応を支援するとともに、生活言語、学習言語の習得を支援するためには、日本語による支援に加えて、母語による支援が求められている。母国で母語を習得し、日本に来た外国人児童生徒は、思考基盤が母語であるため、母語での支援を行うことによって、より効果的に学習言語の習得が図ることができると言われている。

そこで、平成 18 年度より３年間、新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業を実施し、母語を思考基盤とする新渡日の外国人児童生徒の学習言語の習得を支援するとともに、母語・母文化にふれる様々な体験をとおして、アイデンティティの確立を支援する取組を行ってきた。

ア　母語教育支援センターの指定

対象児童生徒が多く在籍する小・中学校で事業実施を希望する学校を母語教育支援センター校に指定し、在籍する児童生徒だけでなく、近隣の学校の外国人児童生徒も参加して母語教室を運営し、日本語習得の基礎となる母語の指導や母文化についての理解を深める教育を行ってきた。

イ　母語教育支援センター校等連絡会

初めての取組であり、教室の運営方法、指導内容や方法がわからないという課題があった。そこで、年に３回、センター校担当者、母語の指導者、市町教育委員会担当者等を対象に、母語教育支援センター校等連絡会を開催し、事業趣旨の共通理解及び事業の充実にむけた情報交換や協議を行った。

(3) 成果

ア　母語教育支援の趣旨等の理解

母語教育支援センター校等連絡会の中で、大学教授等から専門的見地に立った講義を受けるとともに、センター校の取組の実践発表を行うことにより、事業の趣旨や進め方について認識を深めることができた。

母語教育支援センター校の校長や担当者、母語の指導者、児童生徒及びその保護者など関係者が、趣旨を共通理解することにより、事業を円滑に推進できた。

イ　学校における組織的・計画的な母語教室の運営

学校長、担当者を中心に、市教育委員会と連携しながら、校内推進委員会を組織し、担当者及び母語の指導者任せにならないよう組織的・計画的に母語教室の運営を行うことができた。

年間指導計画を策定し、児童生徒の実態を踏まえた指導内容・方法の工夫を行った。

ウ　心の安定

新渡日の外国人児童生徒は、文化や生活習慣の違い等により、日本の学校生活にな

かなかなじめない場合、母国へ帰りたいという思いが強くなり、自分自身の現状を受けとめることが難しいことが多い。

母語教室では、母語が同じ者同士の結びつきが強くなり、母語で安心して話すことができ、また、上級生が進んで下級生に関わりをもとうとする姿が見られた。母語教室に来ることにより、心の安定が図られ、心の居場所となった。

母語教室が、欠席がちな外国人児童生徒にとっても心の居場所となり、登校への意欲を高める効果も見られた。

エ　学習言語の習得

教科学習の内容について、母語の指導者から説明を受けるとともに、日本語から母語に、母語から日本語に置き換えることを通して、母語を思考基盤とする児童生徒の学習言語の習得を促進することができた。

オ　自己肯定感、アイデンティティの確立

母語や母文化にふれる様々な体験をとおして、自分自身を肯定的にとらえ、自分が好きになり、アイデンティティの形成につながった。

アイデンティティがはぐくまれると、学習意欲が高まり、日常の授業においても意欲的に取り組むようになった。

(6) 課題

ア　学習言語の習得に向けた指導内容・方法の充実

学習言語の習得に向け、効果的な指導内容や個に応じた指導方法の工夫改善が必要である。また、そのための教材の選定や開発が求められる。

イ　関係機関等とのネットワークの活用

母語教育支援事業の推進にあたっては、母語教育支援センター校を中心に、市町教育委員会、国際交流協会等関係機関・団体、ボランティア団体、大学等と連携を深め、総合的な取組をすすめる必要がある。

ウ　家庭や地域との連携

事業趣旨に沿った展開を図るため、特に家庭や地域との連携が大切であることから、保護者の思いや願いを踏まえるとともに、地域の人材等を活用して支援することが大切である。

エ　実践報告書の活用

平成 20 年度の母語教育支援事業実践報告書を参考に、関係者がそれぞれの対場から取組を見直すとともに、事業の工夫改善を行う必要がある。

平成 20 年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
神戸市立本庄小学校

1　支援言語：スペイン語

2　対象外国人児童の状況

(1) 日本語理解が十分でなく、他の児童とのコミュニケーションが図りにくいため、小さなトラブルが起こりやすく、人間関係の構築が難しい状況である。

(2) 母国での学習が不十分であり、基礎学力が定着しにくい。そのため、学習への意欲が育ちにくく、自尊感情を育みにくい現状がある。

(3) 家族との会話を母語で行うが、「書く」経験が十分ではない。

3　事業のねらい

(1) 母語の学習を通して、学習言語の習得を促進させるとともに、基礎学力の定着を図る。

(2) 母語の保持を図るとともに、母国の文化･社会への認識を深めることにより自らのアイデンティティを見つめる機会とする。

(3) 母国を知る学習を発表することにより母国や自分への自信や誇りをもてるようにする。

4　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容 活動例	時数
1学期	スペイン語であいさつしよう	スペイン語であいさつや自己紹介できる	簡単なあいさつを覚え、日常的に使う	6
	スペイン語を読む・書く	母語で、正しい発音や文章を書くことができる	正確に発音したり、正確に書いたりする	6
	算数 演算	算数科の基礎･基本を身につける	スペイン語の教科書で演算を学習する	4
2学期	母国の文化を知ろう	母国の生活･歴史･行事を知る	母国の生活･歴史･行事を調べる	8
	スペイン語を読む・書く	母語で、正しい発音や文章を書くことができる	正確に発音したり、正確に書いたりする	8
	算数 演算	算数科の基礎･基本を身につける	スペイン語の教科書で演算を学習する	8
3学期	母国の文化を知ろう	母国の生活･歴史･行事を知る	母国の生活･歴史･行事を調べ、発信する	8
	スペイン語を読む・書く	母語で、正しい発音や文章を書くことができる	正確に発音したり、正確に書いたりする	6
	算数 演算	算数科の基礎･基本を身につける	スペイン語の教科書で演算を学習する	6

5　母語教育支援事例

(1)　事例１

ア　単元

スペイン語を読もう。書こう。

イ　指導目標

スペイン語の一文字ずつの書き方や、読み方を知る。

ウ　指導内容・活動例

横罫のノートやワークシートを活用し、正しい書き順で、一文字ずつの書き方を知り、繰り返し練習する。

エ　指導・支援で留意する点

異学年の児童が同室で学習を行うので、一人一人の児童の既習知識を的確に把握し、個別の指導を行う。

オ　成果

(ｱ) スペイン語の表記の仕方や発音の仕方を知ったり、見直したりする機会となった。

(ｲ) スペイン語でコミュニケーションをとりながら学習を行い、文や単語の発音を自然に理解できるようになった。

カ　課題

(ｱ) 週一回の母語教室でも非常に有効であるが、校内でスペイン語を話す機会は十分ではない。

(ｲ) 書くことは、家庭でもあまり経験がなく、学習内容の定着にばらつきが見られた。

(2)　事例２

ア　単元

スペイン語で自己紹介しよう。

イ　指導目標

文章の中でスペイン語を活用し、スペイン語で伝え合う。

ウ　指導内容・活動例

スペイン語で、自分の特技、自分が経験したこと、自分が伝えたいことなどを中心に自己紹介をする。

エ　指導・支援で留意する点

正しい表記で、伝えたいことを書く。

児童とコミュニケーションを十分にとり、がんばりをほめ、児童の自尊感情を高める機会とする。

オ　成果

既習の知識は異なるが、児童の語彙を活用し、自己紹介の文章を書き、みんなの前で発表することができた。

カ　課題

これまでの生活経験の違いから、スペイン語、日本語ともに、言葉として認識できている範囲の差が非常に大きい。そのため、一部の低学年児童には難しい取組となった。

6　成果

(1)　「楽しい教室活動」を目指す一環として、教室内に自ら作成した自己紹介カードを掲示した。その活動を通して、参加児童の学習意欲の維持と自分の教室であるという意識の高揚につながった。

(2) 全員が参加できる活動計画をつくることで、児童間の教え合い･学び合いが促進され、異学年児童の一斉活動をすすめることができた。

(3) 子ども多文化共生サポーターと連携し、当該児童の在籍学級で、異文化への理解を促す授業を行うことで、母語教室への理解を深めることができた。

(4) 母語教室担当教員以外の教員が、母語教室での指導･支援をしたことで、母語教室の学習状況の理解が深まり、在籍学級での授業へのフィードバックが可能になった。

(5) 母語の理解が進んだことで、学習言語としての日本語理解が進み、大きな効果を上げた。

7　課題

(1) 異学年児童への一斉指導は、児童のレベルの違いから、一人の母語の指導者では非常に厳しい状況である。複数の指導者による指導･支援が必要である。

(2) 子どものたちが時間通りに来ない、参加しても学習に集中しにくいなど、学習への取組にルーズになりやすいので、継続的な配慮が必要である。

8　効果的な教材・教具

(1)『Español como lengua materna』
櫻井千穂・中島永倫子
Francisco Alfaro・Herrera Lourdes 著
こうべ子どもにこにこ会発行
2008 年６月１日（第１版）

(2)　絵本(スペイン語)

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
神戸市立本山第二小学校

１　支援言語：フィリピノ語

２　対象外国人児童の状況

(1) フィリピンから初来日した２名は、フィリピノ語と英語を理解し、書くこともできる。また、２名は英語もフィリピノ語も話したり聞いたりできるが、書くことはほとんどできない。１名は、フィリピノ語の読み書きの方が英語よりもよくできる。

(2) １名は、タイ国のインターナショナルスクールへ通学していたため、英語を母語として育ち、フィリピノ語はほとんど理解できない。フィリピン文化の知識もほとんど持っていない。

３　事業のねらい

(1) フィリピノ語の基本的な単語やフレーズで自己表現をする。

(2) 各教科で学習した日本語をフィリピノ語に、フィリピノ語を日本語に置き換える学習により、学習言語の習得を図る。

(3) 母国の民話や歌等を日本語で表現し、全校に紹介する。

(4) 母国であるフィリピンの言葉や文化、習慣に関心をもつ。

(5) 日本の言葉や文化、習慣に親しむ。

(6) フィリピンと日本の二つの国に親しみ、互いに尊重し合う態度を身につける。

４　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
１学期	フィリピノ語であいさつしよう	フィリピノ語であいさつができる	フィリピノ語のあいさつを覚える	4
	フィリピノ語のリズムを覚えよう	フィリピノ語の基本的な発音やリズムをまねることができる	身近な発音を正しくまねながら言う	4
	フィリピノ語が読めるかな	フィリピノ語を読み、正確に書く	フィリピノ語の発音を正確にまね、アルファベットを正しく書く	12
２学期	フィリピノ語の歌を歌おう	フィリピノ語の歌を歌うことを楽しむことができる	簡単なフィリピノ語の歌を歌う	8
	フィリピノ語の単語を知ろう	身近なフィリピノ語の単語を使うことができる	身近なフィリピノ語の単語の意味とつづりを覚える	8
	母国の遊びを知ろう	母国の伝統的な遊びに関心を持つ	母国の伝統的な遊びについて調べたり、体験したりする	8
３学期	フィリピノ語で何と言うのかな	簡単なフィリピノ語を聞いて理解することができる	簡単な動作をフィリピノ語で指示する	8
	フィリピノ語で話そう	簡単なフィリピノ語文を理解し、表現できる	フィリピノ語を使ったゲームをする	8
	母国の文化を知ろう	母国のお祭りや行事の由来を知る	母国のお祭りや行事の由来について調べて、発表する	8

5　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

フィリピノ語の歌を歌おう。

イ　指導目標

フィリピノ語の歌を歌うことを楽しむ。

ウ　指導内容・活動例

(ｱ) フィリピノ語の代表的な歌である「バハイ・クーボ」を知り、歌う。

(ｲ) 歌詞をフィリピノ語で書き表す。

エ　指導・支援で留意する点

歌詞の中に、たくさんの野菜が出てくる。しかし、児童は名前と実物が一致しないので、インターネットを使って写真を提示し、わかりやすくする。

オ　成果

どの児童も母国の代表的な歌を自信をもって、大きな声で歌えるようになった。

カ　課題

さらに、他のフィリピンの音楽も歌えるように、ＣＤ等の教材を収集する必要がある。

(2) 事例２

ア　単元

母国の文化を知ろう。

イ　指導目標

(ｱ) 自分の経験したフィリピンの身近なことをフィリピノ語と日本語で表現する。

(ｲ) 在籍学級のクラスメートにフィリピンを紹介する。

ウ　指導内容・活動例

(ｱ) フィリピンの一般的な交通機関である乗り合いバスのジプニーとサイドカー付きのオートバイのトライシクルについて調べる。

(ｲ) フィリピノ語と日本語で表現し、在籍学級で児童に発表する。

エ　指導・支援で留意する点

日本の児童にも分かりやすい文を作るよう指導する。

オ　成果

フィリピンの伝統的な文化に限らず、児童が実際に体験していたことで、日本とは異なることを見つければ良いことに気づき、自信をもって取り組むことができた。

カ　課題

高学年の児童には、パソコンを使い、写真等を取り込んだ資料を作成し、発表させたい。

6　成果

(1) アルファベットの表記方法が正しくなった。そのため、ローマ字や英語の表記も正しくなった。

(2) 児童たちがフィリピンの文化に興味と関心もつようになった。一時帰国した際には、文化発表に必要な品物をそろえてきた。

(3) 自尊感情が芽生え、学習意欲、学習言語習得の意欲が高まった。在籍学級で、フィリピンの文化を発表することが増えた。

7　課題

(1) 母語教室運営の関係で、母語教室の時間を、１年生と２年生は水曜日の５時間目に、４年生と５年生は６時間目にしている。兄弟がいっしょになり、学習に集中できない場合もあった。学習に集中できるような教材や課題を毎回準備する必要がある。

(2) 高学年の児童でも、アルファベットが全く書けない児童と、かなりの文章を書ける児童が混在するため、同時に指導することが難しい。一人一人の能力に応じた課題を準備する必要がある。

(3) 思春期を迎えた児童には、家庭内の問題について相談にのり、心の安定を図りながら指導・支援を行う必要がある。

8　効果的な教材・教具

(1) 『フィリピンと出会おう』（国土社）

(2) 『オリーブかあさんのフィリピン民話』（星の環会）

(3) 『フィリピノ語基本単語』（明日香出版社）

(4) 『日本語―フィリピン語―英語辞典』（国際語学社）

(5) 『English Tagalog Dictionary』（National Book Store）

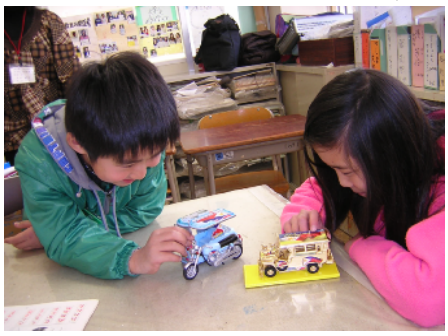
(6) フィリピノ語・英語併記のフィリピンの絵本22冊（現地で購入）

(7) スンカ（板と貝殻のボードゲーム）

(8) 民族衣装（バロンタガログ、ミンダナオ島の民族衣装など）

(9) ７ヶ国語学習言語集（兵庫県国際交流協会のホームページよりダウンロード）

(10) ジプニーとトライシクルのおもちゃ



トライシクル（左）とジプニー（右）のおもちゃ

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
神戸市立こうべ小学校

１　支援言語：中国語

２　対象外国人児童の状況

(1) 渡日後の期間が短く、生活言語、とりわけ学習言語の習得が十分でない児童が多い。

(2) 友だちとのコニュニケーションが不十分であり、小さなトラブルになることがある。

(3) 日本の学校生活への戸惑いが見られ、日本と中国との違いを理解する必要がある。

３　事業のねらい

(1) 中国語で、基本的な単語やフレーズを表現する。

(2) 中国語や中国文化に関心をもち、積極的に調べようとする。

(3) 学習した日本語を中国語に、中国語を日本語に置き換える学習を行い、学習言語への理解を深める。

４　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	中国語であいさつしよう	中国語であいさつができる	中国語のあいさつを覚える	6
	中国語のリズムを覚えよう	中国語の基本的な発音やリズムをまねることができる	身近なものの名前を、発音を正しくまねながら言う	6
	中国語の文字が読めるかな？	中国語の文字を知り、正確に発音できる	中国語の文字とひらがなを比べながら、正確な発音をまねる	8
2学期	中国語の歌を歌おう	中国語の歌を歌うこと楽しむことができる	簡単な中国語の歌を歌う	6
	中国語の単語を知ろう	身近な中国語の単語を使うことができる	身近な中国語の単語を覚える	8
	母国の遊びを知ろう	母国の伝統的な遊びに関心を持つ	母国の伝統的な遊びについて調べたり、体験したりする	8
3学期	母国の文化を知ろう	母国のお祭りや行事に関心を持つ	母国のお祭りや行事について調べる	6
	聞いてみよう、教えてあげよう	簡単な中国語文を使って、質問したり応答したりすることができる	自分が一番大切にしているものや好きなものについて中国語で話をする	6
	中国語で話そう	簡単な中国語文を理解し、表現できる	中国語を使ったゲームをする	6

５　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

冬休みの出来事を作文に書こう。

イ　指導目標

身近な生活について母語で文章を書く。

ウ　指導内容・活動例

冬休みの出来事について話し合った内容をもとに、作文を書く。

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) お互いに相手の話をしっかり聞くようにする。

(ｲ) 話せても書けない言葉の指導を行う。

オ　成果

(ｱ) 母語の表現を学び、学習言語への理解を深めた。

(ｲ) 楽しい雰囲気の中で、冬休みの体験を話し合い、心の交流ができた。

カ　課題

多様な児童に対応した指導方法・内容が必要である。

(2) 事例２

ア　単元

母国の文化（春節と元宵節）を知る。

イ　指導目標

中国の伝統的な祝祭日について学習し、日本と中国の違いと同じところを理解するとともに、アイデンティティをはぐくむ。

ウ　指導内容・活動例

(ｱ) 春節についての思い出を語り合い、関連した言葉を書く。

(ｲ) 元宵節の余興「燈謎」（なぞなぞ）をみんなで解く。

エ　指導・支援で留意する点

児童の実態に応じた問題を用意し、達成感を持たせる。

オ　成果

母国の伝統的な文化・行事について理解を深めることができた。

カ　課題

児童の興味・関心を引き出しながら、学習計画を立てることが課題である。

6　成果

(1) 母語の向上が、学習意欲の向上につながり、日本語習得の向上に大きな影響を与えた。
(2) 日本語指導が必要な児童にとって、母語教室は中国語と日本語の両方で自己表現ができる場所になった。
(3) 母語教室は、同じ母語の児童同士が知り合う貴重な機会となった。出会いを通して、放課後に一緒に遊ぶなど、新渡日の児童にとって、心の居場所になった。
(4) 児童が母国について学習しながら、お互いに学習意欲を高めることができた。

7　課題

(1) 母語教室の適切な教科書がないので、毎回教材を考える必要がある。
(2) 児童の母語のレベルに差があるので、指導の成果にも個人差がある。
(3) 児童の話に耳を傾けることと授業を進めることとのバランスが難しい。そのため、計画通りにはなかなか進まず、年度当初の計画を変更する必要がある。
(4) 母語の指導者に頼りがちになり、内容や方向性について検討する時間が十分に取れない。
(5) 母語教室に参加している児童だけでなく、中国に関わる児童、中国や中国語に興味・関心のある児童へと対象を広げることも検討したい。
(6) センター校に在籍している児童のみで実施している。安全・安心確保の問題から、地域や他校の児童の参加は難しい状況である。

8　効果的な教材・教具

(1) 日本語の絵本（中国語で読み聞かせる）
(2) 手作りのすごろくゲーム（中国語で遊べる）
(3) 個人ファイル（よく言葉を紙にかかせていて、それを個人ファイルに保存している）

＊母語教室　毎週木曜日の放課後
１４：４５～　１・２年
１５：３０～　３年以上

漢字（中国語）の書き方の練習

中国語の聞き書きの練習

作文を発表する児童

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語支援事業実践事例
神戸市立港島小学校

1　支援言語：中国語

2　対象外国人児童の状況

(1) 対象児童の状況は多様で、中国で育って日本へ来た子もいれば、日本で生まれ育った子もいる。

(2) 家庭で中国語を使っている児童は、日本語の生活言語、学習言語の習得が十分でない場合が多い。

(3) アイデンティティの面では、ほとんどの子は程度の差はあれ、中国人としての自覚をもっているが、中には日本名を使っている子どももいる。

3　事業のねらい

(1) 母語教室に進んで参加する態度を身につける。

(2) 母国の言語や文化に関心をもち、進んで尋ねたり、調べたりしようとする態度を身につける。

(3) 中国語の基本的な単語やフレーズを使って表現する能力を身に付ける。

(4) 日本語を中国語に置き換えたり、中国語を日本語に置き換えたりすることで、言語としての共通点や相違点に気づき、学習言語の習得に生かす。

4　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	中国語であいさつ	中国語であいさつができる	簡単なあいさつを覚え、日常的に使う	4
	中国語のリズムを覚えよう	中国語の基本的な発音ができる	学校生活の中の身近なものの名前を、正しい発音で言う	4
	中国語が読めるかな？	中国語と日本の漢字を比べて違いを知り、正確に発音できる	中国語と日本の漢字を比べながら、正確な発音をまねる	4
2学期	中国語の歌を歌おう	中国語の歌を歌うこと楽しむことができる	中国語の歌の意味を理解しながら歌う	8
	中国語の物語を読もう	中国語で書かれた文を読み、意味を理解することができる。	『はらぺこあおむし』『スイミー』を声に出して読む	14
	紙芝居を作ろう（1）	みんなで協力して、紙芝居を作成する	場面ごとに絵を描き、中国語の文を読む	8
3学期	母国の文化を知ろう	母国の遊びや料理に関心をもつ	母国の遊びを楽しんだり、料理を作ったりする	6
	紙芝居を作ろう（2）	中国語で書かれた文を読み、内容を理解することができる	『百万回生きた猫』を紙芝居にして、上演する	8
	中国語で歌おう話そう	簡単な中国語を理解し、表現できる	今まで勉強した中国語を使ったり、歌を歌ったりして、みんなで楽しむ	4

4　母語教育支援事例

(1)　事例１

ア　単元

中国語で紙芝居をしよう。

イ　指導目標

中国語の紙芝居を作成し、発表会をすることで、中国語の発音や表現に慣れ親しむ。

ウ　指導内容・活動例

(ｱ) 子どもたちが興味をもちやすく、また内容が理解しやすいという理由から、次の中国語版の絵本三冊を教材に選んだ。

①　『はらぺこあおむし』－１年生向け。月曜日から土曜日までいろいろな食べものを食べ、日曜日にきれいなチョウになるお話で、子どもにとても人気のある絵本である。

②　『スイミー』－２年生向け。２年生の教科書(光村図書)に掲載されているお話なので、子どもたちは内容をよく知っている。

③　『百万回生きた猫』－３～５年生向け。これも子どもたちに人気のある絵本で、中学年以上に適している。

以上三冊を教材に全員で学習する。

(ｲ) 『はらぺこあおむし』の学習では、学習時間の前半、講師が読み方や意味を教え、中国の小学校での学習経験のある上級生が低学年をサポートするという形で学習を進めた。そして、後半は、１年生、２年生、３～５年生のグループごとにそれぞれ教材の絵本を参考に、紙芝居を作成する。

(ｳ) 11 月は『スイミー』の学習を進め、12 月は、１年生は『はらぺこあおむし』の紙芝居を、２年生は『スイミー』の紙芝居を、各学年の児童

に見てもらう発表会をひらく。

(ｴ) 3学期は、3～5年生は『百万回生きた猫』の紙芝居作りを中心に、1～2年生は中国の歌を中心に学習を進める。

エ　指導・支援で留意する点

中国語の理解が十分でない児童は、中国語の発音や表現練習を長時間続けることが困難なので、中国の歌を歌ったり、紙芝居の絵を描いたりすることで意欲を持続させるようにする。

オ　成果

(ｱ) 12 月に、1年生、2年生のそれぞれが、「友だちのくに-中国を知ろう-」という発表会を開いた。

「スイミー」の発表（2年生）

発表内容は、今まで制作してきた紙芝居を中心に、中国の歌も披露した。その後、参加者全員で、「空中ごま」「チェンズ」など中国のおもちゃを使って遊び、母文化への理解を深めた。

(ｲ) 日本語訳を交えながらの紙芝居は大好評で、日本の子どもたちは原作の絵本を見て、「うわあ、かんじばっかりや。」と驚いていた。紙芝居を上演した子どもたちも、家で父母に教えてもらいながら中国語の練習をしたり、上級生に発音を教えてもらったりして、生き生きと活動することができた。

(ｳ) この取組を通して、中国の異年齢の子ども同士のつながりができ、高学年の子どもたちが進んで低学年の子どもたちに関わろうとする姿が見られた。

(ｴ) 家庭でも、中国語を通して親子の交わりがいっそう深くなった。

カ　課題

(ｱ) 1年間、中国語の能力が異なる子どもたちが意欲的に学び、活動する場を設定し、モチベーションを持続させることが課題である。

(ｲ) 今年の取組をふりかえり、内容的にはもっと日常会話を取り入れたり、簡単な文を書いたりするという学習が必要である。

(2)　事例2

ア　単元

行事のアナウンスを中国語で！

イ　指導目標

運動会、音楽会などのプログラム案内放送を中国語で行うことにより、中国の子どもたちが自らの言語や文化に自信をもつ。

ウ　指導内容・活動例

家庭に協力を依頼し、アナウンスの内容を中国語に翻訳する。それをもとにして、みんなで発音の練習会をし、希望者が、行事の当日のアナウンスを担当する。

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) 家庭の協力を得ることで、家庭内での中国語会話の機会が多くなるようにする。

(ｲ) 学校生活の場で、中国語が使われることへの抵抗感を少なくする。

オ　成果

(ｱ) 行事での中国語アナウンスは、外国人児童が多い港島小学校らしさがよく表れていた、という高い評価を得て、アナウンスを担当した子どもたちはずいぶん自信をもった。

(ｲ) 1月、中国天津市のスポーツ交流団が本校を訪問し、交流を深める機会があった。その際、全校歓迎会の司会を中国人児童が務め、練習してきた中国の歌も披露し、成果を発表した。

カ　課題

この取組では、1年生から5年生の8人の中国人児童がアナウンスを担当した。しかし、まだみんなの前で中国語を使うことに抵抗感をもつ子どもがいるので、さらにはたらきかけを強めたい。

5　成果

(1) 中国語を使うことへの抵抗感が薄くなり、逆に自信をもって学校生活を送ろうとする態度が見られた。

(2) 中国人児童同士のつながりが深くなり、特に上級生が進んで下級生に関わろうとする態度が見られた。

(3) 家庭に協力を依頼することで家庭との連携が深まり、「中国料理を作る会」の講師をしていただくなどのつながりができた。

天津市スポーツ交流団を歓迎する歌

(4) 学校全体に、異文化を大切にして、共に生きていこうとする意識がより強くなった。

6　課題

中国語能力に大きな違いのある子どもたちが、意欲的に学べるような教材や指導法の開発が必要である。

7　効果的な教材・教具

(1)　『はらぺこあおむし』（中国語版）
(2)　『スイミー』（中国語版）
(3)　『百万回生きた猫』（中国語版）
(4)　中国の歌（VCD）
(5)　中国のお話（VCD）
(6)　中国のおもちゃ「空中ごま」「チェンズ」

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
神戸市立御蔵小学校

1　支援言語：ベトナム語

2　対象外国人児童の状況

(1) 本校に在籍する新渡日のベトナム人児童の多くは、家庭では母語で生活しており、母語が思考基盤になっている。しかし、母語学習の経験がなく、「話す」「聞く」ことはできても「書く」「読む」ことはほとんどできない。

(2) ダブルリミテッド（母語も日本語も十分に使えない状態）になりかけている子どもがいる。学力的な課題も大きく、個別の支援が必要である。

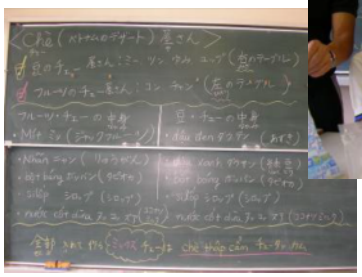
(3) 母国での学習が不十分なため、基礎学力の定着が難しい。そのため、学習に対する意欲が育ちにくく、自尊感情がはぐくみにくい現状がある。

3　事業のねらい

(1) ベトナム語母語教室「チャオ教室」に参加し、母語を通して基礎学力の定着や学習言語の習得を図る。

(2) ベトナムの文化･社会への認識を深めることにより自らのアイデンティティをみつめる機会をもつ。

(3) ベトナムを知る学習を発表することによりベトナムや自分への自信や誇りをもてるようにする。



ベトナム語の板書

ベトナムの食べ物

4　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	ベトナム語であいさつをしよう	ベトナム語であいさつができる	ベトナム語であいさつしたり、自分のことを紹介したりする	6
	ベトナム語で話そう	ベトナム語の基本的な発音やリズムを正しくできる	身近なものの名前を発音やリズムに気をつけながら正しく話す	4
	ベトナム語を読もう	ベトナム語の文字を知り、正しい発音で読むことができる	ベトナム語の文字とひらがな･漢字を比べながら正しい発音で読む	4
2学期	ベトナム語で歌おう	ベトナム語の歌を楽しむことができる	簡単なベトナム語の歌を歌う	10
	ベトナムの遊びをしよう	ベトナムの伝統的な遊びに関心をもつことができる	ベトナムの伝統的な遊びについて、調べたり体験したりする	10
	ベトナム語で何というのかな？	簡単なベトナム語の文を聞いて理解することができる	簡単なベトナム語(ものの名前･動作等)を聞いたり話したりする	10
3学期	ベトナムの食べ物を調べよう	ベトナムと日本の食べ物の違いや共通点に気づき、関心をもつことができる	ベトナムの食べ物について調べ、簡単な調理を楽しむ	8
	ベトナム語で話そう	簡単なベトナム語の文を理解し、表現することができる	ベトナム語を使ったゲームをしながら聞いたり、話したりする	4

5　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

ベトナムのデザートを作ろう!

イ　指導目標

(ｱ) ベトナムの代表的なデザート「チェ（冷やしぜんざい）」の作り方を知る。

(ｲ) デザート作りを通して、ベトナムの文化にふれる。

(ｳ) 「チャオ教室」の仲間意識を育てる。

ウ　指導内容・活動例

夏休みのサマースクールでは、ベトナムのデザート作りに挑戦した。

(ｱ) ベトナムのデザートについて話し合う。材料の名前をベトナム語で書く、読む。

(ｲ) デザート作りの計画を立てる。

(ｳ) お店屋さんの準備をする。

(ｴ) フルーツを切る。

(ｵ) かき氷を作る。

(ｶ) 先生方を招待し、お店屋さんをする。

(ｷ) 後始末・感想を発表する。

エ　指導・支援で留意する点

「チェ（冷やしぜんざい）作り」では、子どもたちが好きな材料を選び、みんなで手順を確認した後、１年生から６年生までが役割を分担し、協力して作る。

オ　成果

高学年が低学年に作り方を教える姿や、活動を参観に来た教師たちに得意げに材料の説明をする様子が見られ、意欲的に取り組むことができた。

カ　課題

「チャオ教室」への参加に対して意欲的でない子どもたちの実態がある。学級担任・支援教員が該当児童に関わり、参加を働きかけることが必要である。

(2) 事例２

ア　単元

ベトナム語でゲームをしよう。

イ　指導目標

(ｱ) 遊びを通してベトナム語に親しむ。

(ｲ) 簡単なベトナム語の読み書きができる。

(ｳ) 「チャオ教室」の仲間意識を育てる。

ウ　指導内容・活動例

(ｱ) ベトナム語じゃんけんをする。

(ｲ) ジェスチャーゲームをする。

・ベトナム語で「たかい」「かるい」「はやい」「たのしい」等の言葉の読み、書きを知る。

・ジェスチャーゲームをベトナム語でする。

(ｳ) 魚釣りゲーム

・魚の絵にクリップをつけて磁石をつけた釣竿で釣る。

・ベトナム語で 魚の名前を言い合う。

エ　指導・支援で留意する点

該当児童が、母語教室を楽しみにするような「楽しい教室活動」を目指す。

オ　成果

参加児童が１年から６年にわたるが、歌･ゲーム･クイズや料理教室等体験的な活動を取り入れ、子どもたちのモチベーションを保つことができた。

カ　課題

子どもの実態に応じたカリキュラムづくりと教材開発が必要である。

6　成果

(1) 「チャオ教室」に来ると、ベトナム語での質問に元気よく答え、一生懸命文字を書いて学習した。

(2)「チャオ教室」でのカルタ取りでは、教師は全く太刀打ちできない。みんな、授業で見せる姿より生き生きとしている。ここは、子どもたちにとって安心してベトナムのことを話したり学んだりできる心の居場所となった。

(3) 事業推進にあたっては下記の事項に留意し取組をすすめ、効果をあげた。

・母文化、自分自身のルーツに自信が持てるよう、自分自身のアイデンティティの確立につながることを目的とした活動を取り入れる。

・多学年にまたがる児童の実態を勘案し、全員が参加できる活動案を作成する。

・児童間の教え合い･学び合いを促進する。

(4) 母語の指導者と担当教員の協働によって独自カリキュラムを作成し、学習を進めることにより、子どもたちの実態にあわせた進め方を行うことができた。

(5) パーソナルポートフォリオを一人一冊作り、母語教室の学びと自分自身の成長を確かめることができた。

7　課題

母語の指導者一人では、学年の違う児童の指導･支援を行うことは難しい。

8　効果的な教材・教具

ベトナム語テキスト

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
神戸市立真陽小学校

1　支援言語：ベトナム語

2　対象外国人児童の状況

(1) 児童の母語や日本語の習得状況は様々である。

(2) 母語については、家庭内の生活言語として使っている場合が多いので、聞く・話すことはできる児童は多い。しかし、文字を書く・読むことは、難しい状況にある。

(3) 日本語については、生活言語として使える児童は多いが、学習言語の習得については、未だ不安定な状況にある。

(4) 生活言語の習得が不十分な児童は、自分の思いをうまく話すことができず、そのことが原因で友だちとトラブルになることがある。

3　事業のねらい

(1) ベトナム語で簡単なあいさつや会話ができる。

(2) ベトナム語での文字や単語の読み書きができ、日本語と比べることができる。

(3) ベトナム語の歌や劇、遊びなどに興味をも持ち、進んでやってみようとする。

(4) ベトナムの文化を誇りに思うことができる。

獅子舞（ムーラン）の発表

4　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	ベトナム語でのあいさつ	ベトナム語であいさつや自己紹介ができる	簡単なあいさつや自己紹介の言葉を覚え、友達とあいさつを交わす	4
	ベトナムの言葉を覚えよう①	簡単なベトナム語を読むことができる	生活の中で身近な物の名前をベトナム語や日本語で発音する	4
	友だちを増やそう	他校の母語教室の仲間とつながることができる	手紙を書いたり、メールの交換をしたりして、仲間とつながる	6
夏休み	ベトナムの食べ物を調べよう①	ベトナムの食べ物を調べ、作って食べる	家庭からベトナム料理の作り方を教えてもらい、みんなで作る	6
2学期	ベトナムの文字を書こう①	ベトナム語の文字を書くことができる	テキストを用いて、ベトナム語の文字を覚え、書く	10
	ベトナムの言葉を覚えよう②	簡単なベトナム語を正しい発音で読むことができる	いろいろな物の名前をベトナム語や日本語で正しく発音する	8
	獅子舞（ムーラン）を踊ろう①	ムーランを知り、踊りを練習する	ムーランを見て、自分たちもできるよう練習する	8
冬休み	ベトナムの食べ物を調べよう②	ベトナムの食べ物を調べ、作って食べる	家庭からベトナム料理の作り方を教えてもらい、みんなで作る	4
3学期	ベトナムの文字を書こう②	簡単なベトナム語の文章を書くことができる	ベトナム語の短い昔話を聞き、自分たちで絵本を作る	6
	コリアン・ベトナムフェスティバル	母語教室で学習したことをフェスティバルで発表する	母語教室で体験してきたことをフェスティバルで発表する	8
	獅子舞（ムーラン）を踊ろう②	ムーランを知り、踊りを練習する	ムーランを練習し、全校に向けて発表する	8

5　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

ベトナムの文字を書こう②

イ　指導目標

簡単なベトナム語の文章を書くことができる。

ウ　指導内容・活動例

(ｱ) ベトナム語の昔話を聞く。

(ｲ) 指導者から話の内容について説明を受ける。

(ｳ) 話の場面ごとに分担を決める。

(ｴ) 話の絵を描く。スキャナーで取り込んでプレゼンソフトで電子絵本にする。

(ｵ) 絵の内容をベトナム語で説明できるよう練習をする。

(ｶ) 作った絵本をプロジェクターで投影しながら、朗読をする。

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) 正しいベトナム語が習得できるよう、発

音に注意しながら練習する。
(ｲ) 話の内容だけでなく、ベトナムの人々の文化（米作りや自然災害への思い）を感じ取れるようにする。

オ　成果
(ｱ) ベトナム語の単語をたくさん覚えることができた。
(ｲ) 全校児童に母語教室「ホアマイ教室」の活動について知ってもらうことができた。
(ｳ) ベトナムの話に興味をもって取り組むことができた。
(ｴ) 話の絵を楽しんで描くことができた。

カ　課題
(ｱ) 子どもによって、学習に対する意欲に大きな違いがある。
(ｲ) ベトナム語の習得が十分でない子にとって、課題がやや難しかった。
(ｳ) 絵本の作成に時間がかかった。

(2) 事例２

ア　単元　獅子舞（ムーラン）を踊ろう②

イ　指導目標
「コリアンベトナムフェスティバル」の発表にむけて自分たちで振り付けを工夫しながら、ムーランの練習をする。

ウ　指導内容・活動例
(ｱ) 昨年のムーランのＤＶＤを見る。
(ｲ) 自分たちで役割分担やムーランの振り付けを考える。
(ｳ) 体育館で練習をする。
(ｴ) 小道具を作る。
(ｵ) 「コリアンベトナムフェスティバル」で発表する。

エ　指導・支援で留意する点
(ｱ) 「コリアンベトナムフェスティバル」の発表という目標をもたせ、意欲を持続させる。
(ｲ) 自分たちで、役割分担や振り付けを工夫することで、自主性を育てる。
(ｳ) 発表を行うことで、ベトナムの文化にふれ、興味をもつきっかけとする。

オ　成果
(ｱ) 発表を行うことで、ベトナムの文化にふれ、ベトナムのことをもっと知りたいという子どもが増えた。
(ｲ) みんなで一つのことに取り組むことにより、仲間意識が少しずつ育ってきた。
(ｳ) 保護者が、衣装の制作や太鼓のたたき方の指導に協力する機会が多くなった。

カ　課題
(ｱ) 子どもの参加の意欲に大きな差がある。
(ｲ) 近くにムーランの指導者がいないため、本格的なムーランの動きを習得することが難しい。そのため、なかなか内容が発展していかない。

6　成果
(1) 本校での取組も三年目をむかえ、子どもたちは母語の学習に慣れてきた。文字や単語を書くことも以前よりスムーズになり、短い文を書くことがきるようになった子どもが多い。
(2) 母語教室で一緒に料理を作ったり、ムーランの衣装を縫っていただいたりする活動を通して、子どもたちが保護者とベトナムの言葉や文化について話す機会が増えた。家庭と連携した活動を今後も続け、保護者の意識を高めたい。
(3) ムーランを見られたたかとり教会の関係者から教会の春節祭に招かれ、演技を行った。演技終了後も一緒に食事をしたりして交流を深めることができた。校内だけでなく、地域にも活動の場を広げることができた。
(4) 文化を学ぶ学習に子どもたちは、とても興味を持った。特にムーランの練習には意欲的に取り組み、「コリアンベトナムフェスティバル」に向け、熱心に練習した。
(5) ベトナムの子どもたちが集まることで、同じ民族であることを意識し、互いにつながるきっかけとなった。

7　課題
(1) 一人一人の母語の理解度に大きな開きがあり、一斉に同じ学習に取り組むことは難しい。また、家庭でベトナム語を保護者から学んでいる子とそうでない子の差も大きい。
(2) 高学年は、放課後に様々な活動があり、母語教室に参加しにくい状況がある。
(3) 母語教室の実施時間や行き帰りの安全のことを考えると、他校の児童との交流活動を行うことが難しい状況である。

獅子舞（ムーラン）の発表

8　効果的な教材・教具
(1)『ＴＩＥＮＧ　ＶＩＥＴ　ＶＵＩ』（ベトナム語の練習帳）
(2) 獅子舞（ムーラン）道具一式

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
神戸市立神陵台小学校

１　支援言語：中国語

２　対象外国人児童の状況

(1)対象児童のほとんどが中国残留孤児3世、4世であり、初期の生活適応はできている。

(2) 文化や考え方の違い、日本語の習得の度合いから生じる意味の取り違い、中国と日本との間に起きている問題が悪ふざけの材料となり、日頃仲良く遊んでいる友だちでも、時には配慮のない言葉を浴びせ、トラブルを生じる場面が見られる。これは、地域に根強く残る偏見･差別の表れだと思われる。これらに対して自ら立ち向かい、自己表現の場や学習・集団行動へ自信をもって参加できるよう、日本語の習得を高めることはたいへん重要なことである。

(3) 家庭内では、両親が日本語を話さず中国語で会話をする場合が多い。一方、子どもは中国語よりも日本語を話す場合が多いため、家庭内での会話が成立しなかったり、子どもが日本語に対して自信がなく、考えを的確に伝えることが苦手な面がしばしば見られる。
　さらにコミュニケーション不足によるトラブルも多くなりがちである。

３　事業のねらい

(1) 中国語の母語教室の活動に、楽しく積極的に参加することができる。

(2) 母国(中国)の言葉や文化に関心をもつ。

(3) 中国語と日本語とで、生活や学習に必要な単語やフレーズを習得・活用し、学習言語の習得を図る。

(4) 教室で学んだことを家庭でのコミュニケーションに生かすことができる。

４　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	中国語であいさつをしよう	中国語であいさつや自己紹介ができる	簡単なあいさつを覚え、日常的に使う	6
	中国語のリズムを覚えよう	中国語の基本的な発音ができる	学校生活の中の身近なものの名前を正しい発音で言う	6
	中国の文字が読めるかな（1）	中国の文字と日本の漢字を比べ、違いを知る	中国の文字と同じ意味の日本の漢字とを調べ、違いを見つける	6
2学期	中国の文字が読めるかな（2）	中国の文字を正しく発音する	ピンインを学習し、正確な発音をする	20
	中国語の歌を歌おう	中国語の歌を楽しく歌う	中国の歌の意味を理解しながら歌う	8
	中国の文化を知ろう（1）「食べ物」	中国と日本との食べ物の違いを知り、興味をもつ	母国の食べ物について調べ、その特徴、日本との違いに気づく	8
3学期	中国の文化を知ろう（2）「行事･遊び」	中国の「お祭り・行事・遊び・ゲーム」等に関心をもつ	中国ではどんなお祭りや行事、遊びやゲームがあるのかを調べる	8
	聞いてみよう 教えてあげよう	中国語も使って、質問したり、応答したりすることができる	自分の大切にしているものや好きなことについて中国語で話す	4
	中国語で話そう	中国語の文を理解し、表現できる	中国語を使ったゲームをする	4

５　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

中国語のリズムを覚えよう。

イ　指導目標

中国語の基本的な発音ができる。

ウ　指導内容・活動例

学校生活の中の身近なものの名前を正しい発音で言う。

(ｱ) 学習に使うものをいくつか出す。
・学習や行事で使うもの
・当番活動で使うもの

(ｲ) 読み方を知る。
・絵カードを出し、日本語と中国語の読みを表示する。

・発音する。
(ｳ) 発音の練習をする。
・全員で指導者の発音に続いて発音する。
・各自で発音する。
(ｴ) カルタ形式で絵カードの取り合いをする。

エ　指導・支援で留意する点
(ｱ) 絵カードを使い、日常の学習やさまざまな活動場面を想起させる。
(ｲ) ピンイン（中国語の発音記号）を確実に覚えるために一人一人に表を渡す。
(ｳ) 感覚で覚えられるように繰り返し読む。
(ｴ) 自分が使用するときには必ず読ませる。
(ｵ) 教室の入口に、母語教室の札をかけ、他の児童にも関心をもたせる。

オ　成果
(ｱ) 興味を持ち、問いかけによく答えた。
(ｲ) 母語と日本語の習得することに意欲をもった。
(ｳ) 周りの子どもたちが興味をもつことにより、関係が深まった。
(ｴ) 中国の文化に対して興味を持って、学習できた。
(ｵ) 家庭でのコミュニケーションの活性化を促すことができた。

カ　課題
(ｱ) 家庭での母語教育の推進（復習）
(ｲ) 中国滞在年数の違いによって中国語の習得レベルが違うので、個に応じた指導が必要である。

(2) 事例２

ア　単元
中国の文字が読めるかな（4･5･6 年生）。

イ　指導目標
中国の文字を正しく発音する。

ウ　指導内容・活動例
運動会のアナウンス原稿の読み方を覚える。
(ｱ) 翻訳した原稿に読みカナを書く。
(ｲ) 発音、強弱、抑揚について適切な指導を個人で受ける。
(ｳ) 声に出して、本番と同じようにアナウンスをする。
(ｴ) 暗記をする。
＊(ｲ)～(ｳ)を繰り返し、アナウンスのレベルを上げる。

エ　指導・支援で留意する点
(ｱ) 聞き手に伝わるよう、発音については特に細かく聞く。
(ｲ) 個人練習用テープを持たせ、発音を繰り返し、チェックする。
(ｳ) マイクを使用し、内容が聞き手に伝わるか、互いに聞きあう。

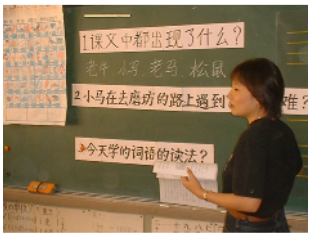
オ　成果
(ｱ) より正しい発音が身についた。
(ｲ) 言葉の聞き分け能力が高まった。

カ　課題
(ｱ) 練習時間の確保
(ｲ) 指導者の増員による練習内容の充実

6　成果
(1)　生活言語、学習言語の習得に効果があった。
(2)　帰国・外国人児童教室を設置し、そこで過ごすことによって、授業時間、休み時間を問わず、児童の心理的な安定が保たれた。
(3)　運動会や音楽会で中国語によるアナウンスをすることにより、帰国・外国人児童の活動の場ができ、積極的な学校生活につながった。また、校区に在住する中国からの帰国者の方々にとって、学校へ来られることが楽しみとなるよい機会となった。
(4) 中国より編入学した児童にとって、仲間とのよい交流の場となり、学校生活に早く慣れることにつながった。

7　課題
(1) 生活、学習どちらの面においても、「聞く」「話す」だけでなく「読む」「書く」の領域まで個に応じた指導が必要である。特に高学年では、「書く」要素を多く取り入れ、文字の習得を図ることが課題である。
(2) 各学年の活動、行事、学習内容に沿って、さらなる言語の習得を図る必要がある。
(3) 運動会、音楽会に向けて、アナウンスの練習時間の確保が課題である。

8　効果的な教材・教具
(1) アナウンス個人練習用テープ
(2) ピンイン表
(3) 絵カード



発音の練習

絵カードの取り合い

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
尼崎市立園田北小学校

１　支援言語：ベトナム語

２　対象外国人児童の状況

(1) 母語教室は、センター校の小学生だけでなく、近隣の中学生も参加している。

(2) どの子どもも日本語については、日常の生活言語をほぼ理解しており、聞く、話す等がはぼできるが、学習言語の習得は不十分である。

(3) 参加児童生徒は、ベトナムへの理解が不十分であり、ベトナム人としての自覚や誇りが十分に育まれていない。

(4) ベトナム語の会話ができない子どももいる。保護者は日本語での会話が十分できないため、親子のコミュニケーションが円滑であるとは言えない家庭もある。

３　事業のねらい

(1) 発達段階に応じた母語指導方法を創意工夫し、児童の母語習得の円滑化を図る。

(2) 母語によるコミュニケーション力を身につけさせることにより、ベトナム人としての自覚や誇りを育成する。

(3) 母語・母文化の学習への意欲を高めるために、体験的な活動を積極的に取り入れて、アイデンティティの確立を図る。

(4) 計算・漢字・音読の繰り返し練習を通して、学習言語の習得や基礎学力の向上を図る。

(5) 「豊かに共生する心」をはぐくむために、ベトナム文化と日本文化について学習する。

４　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	ベトナム語で自己紹介しよう	ベトナム語で自己紹介できる	ベトナム語で自分の名前を言ったりあいさつしたりする	2
	ベトナム語を正しく言おう	ベトナム語の基本的な発音が正しくできる	身近なものの名前を言ったりあいさつをしたりする	8
	ベトナムの文字が読めるかな？書けるかな？	ベトナムの文字が読め、正確に書くことができる	ベトナムの文字を見ながら、正確に発音したり、正確に書いたりする	10
2学期	ベトナム語の歌を歌おう	ベトナム語の歌を歌うことを楽しむことができる	ベトナム語の歌の意味を日本語でも考えながら歌う	8
	ベトナムの文化を知ろう	ベトナムのお祭りや行事の由来を知る	ベトナムのお祭りや行事の由来について調べる	8
	ベトナム語でなんと言うのかな？	各教科に出てくる言葉をベトナム語に置き換えることができる	２学期に習った学習言語をベトナム語に置き換え、教科ごとにまとめることをとおして覚える	10
3学期	文化の違いを知ろう	日本語とベトナム語の表現の違いを知り、興味を持つことができる	ベトナムと日本での会話時のジェスチャー等の違いを学習する	8
	自分の考えを話そう	簡単なベトナム語で話したり書いたりできる	決められたテーマについて、自分の考えをベトナム語で話したり書いたりする	8
	ベトナム語で何と言うのかな？	各教科に出てくる言葉をベトナム語に置き換えることができる	３学期に習った学習言語をベトナム語に置き換え、教科ごとにまとめることをとおして覚える	8

５　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

ベトナム語の文字が読めるかな？書けるかな？

イ　指導目標

ベトナム語の文字を読み、正確に書くことができる。

ウ　指導内容・活動例

ベトナム語のカルタを制作する。

エ　指導・支援で留意する点

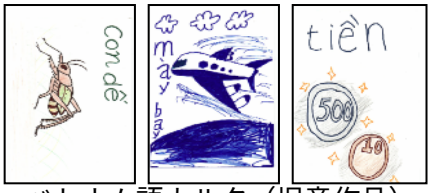
文字だけではなく絵も添えることで、ベトナム語の単語のイメージを強くもてるよう支援する。

オ　成果

カルタ制作に時間をかけたので、一つの単語（絵と文字）を覚えることができた。また、絵と発音と文字を組み合わせたことで、習得レベルの異なる児童たちが協力してカルタの制作に取り組んだ。

カ　課題

実際にカルタで遊んだときに、自分の描いたものをすぐにあててしまうため、他の児童が作成した単語は覚えにくくなってしまう。



ベトナム語カルタ（児童作品）

(2) 事例２

ア　単元

ベトナムの文化を知ろう。

イ　指導目標

ベトナムのお祭りや行事の由来を知る。

ウ　指導内容・活動例

(ｱ) インターネットを活用して、テト（ベトナム旧正月）について調べる。

(ｲ) 獅子舞（ムーラン）を体験的に学習する。（ベトナムから購入した衣装を着る。）

(ｳ) 尼崎市民祭りのパレードの獅子舞の様子をＤＶＤで見て、イメージを持つ。

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) 調べ学習をしっかりとし、情報を整理して、知識を増やすことの楽しさを味わわせる。

(ｲ) 見よう見まねで、獅子舞の衣装を着て、体験的に学習させる。

オ　成果

(ｱ) インターネットを利用した調べ学習に大変関心を示し、熱心に取り組んだ。

(ｲ) 本物を身につけることは嬉しくて、何度もやりたいという児童ばかりで、本当に、楽しい時間となった。

カ　課題

(ｱ) 調べた情報を整理するとき、言葉の意味や説明の内容等がよく分からないこともでてきて、難しかった。

(ｲ) 体験的に学習する教具は効果的であり、今後とも教材の選定に配慮が必要である。

獅子舞（ムーラン）の練習風景

6　成果

(1) 低学年の児童については、母語を聞く、話す学習に楽しく取り組んだ。カルタ作り、テトの飾り作り、歌、踊りなどにも意欲的に取り組んだ。

(2) 高学年の児童については、聞く、話す、読むといった母語の学習やカルタ作り、テトの飾り作り、歌、踊り等を熱心に取り組み、成果を上げた。

(3) 語彙数は、継続的な学習指導により順調に増えた。その状況は低学年より高学年の方が成果が上がった。

(4) ワーク形式のテキスト『楽しいベトナム語』を活用し、ベトナム文字を書くことによりベトナム語の習得を図った。低学年では当初難しかったが、ゲーム的なもの等、教材の工夫により意欲的に学習に取り組むようになった。

(5) ベトナム語の発音については、段々と良くなり、ベトナム語らしい発音ができるようになった。

7　課題

(1) ベトナム語学習への意欲を高めるために家庭と協力して進めていく。

(2) ユイ教室で、ベトナム語の音声教材を導入してベトナム語学習の日常化を図る。

(3) パソコンを活用し、ベトナム語文字入力ソフトを導入することで、活字としてベトナム語の習得を図る。

(4) ビデオを活用して獅子舞の技能の習得を図る。

(5) ベトナムの子どもの遊びについての情報収集を図り、体験的に学習する。

(6) ベトナム語の絵本や紙芝居等の教材を確保し、子どもたちが楽しくベトナム語学習ができるように工夫する。

(7) 短いお話をもとにして、ベトナム語の劇づくりをし、演じるための学習を進める。

8　効果的な教材・教具

(1) ＮＰＯトッカビ子ども会制作のテキスト『たのしいベトナム語』

(2) 八尾市立高美南小学校制作紙芝居『テンキュー』

(3) 獅子舞「ムーラン」のセット尼崎市民まつりのＤＶＤ

(4) 中秋まつりのプリント、ちょうちん等の飾り

(5) 絵カード（くだもの、やさい）

(6) 踊り「ベ・ベ・ベ」（蝉の鳴き声を聞く）

平成20年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
西宮市立神原小学校

1　支援言語：インドネシア語

2　対象外国人児童の状況

(1) 保護者の勤務の都合で、渡日時期(年齢)や在籍期間が多様であり、日本語・母語ともに習得状況にかなりの差がある。

(2) 幼少時に渡日した児童は、ある程度日本語で会話し、学習言語の習得はある程度進んでいるが、家庭で生活言語として母語を話したり聞いたりはできても、母語で書かれた文を読むことができず、母文化についてほとんど知らない。

(3) 母語で簡単な日常会話はできても、文や言葉として正しく書くことができない児童がいる。

3　事業のねらい

(1) インドネシア語を学ぶ活動に積極的に参加する態度を身に付ける。

(2) インドネシア語の基本的な単語やフレーズで表現することができる。

(3) 母語や母文化に関心をもち、積極的に調べようとする。

(4) 各教科で学習した日本語をインドネシア語に、インドネシア語を日本語に置き換える学習を通して、学習言語の習得を図る。

4　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	インドネシア語であいさつしよう	インドネシア語であいさつできる	インドネシア語で自分の名前を言ったり家族の紹介などをしたりする	1
	インドネシア語で話そう	インドネシア語で簡単な会話ができる	学校生活や日常生活の中での出来事を、発音に気を付けながら会話する	3
	インドネシア語が読めるかな？書けるかな？	インドネシア語が読め、正しく書くことができる	インドネシア語の教科書などを見ながら、正しく発音したり、正しく書いたりする	4
	インドネシアの料理を作ろう	インドネシアの料理作りを通して母国の伝統などを知る	料理の計画をしたり、協力しながら楽しく作ったりする	3
2学期	インドネシアの歌や楽器を楽しもう	インドネシアの歌や楽器を楽しむことができる	インドネシアの歌や伝統的な楽器について理解し、演奏する	4
	母国の文化を知ろう	母国の食べ物・習慣・遊び・行事について知る	母国の文化について知り、詳しく調べる	8
	インドネシア語で何と言うのかな？	各教科に出てくる言葉をインドネシア語に置き換える	２学期に習った学習言語をインドネシア語に置き換え、覚える	4
3学期	文化の違いを知ろう	インドネシアと日本の共通点や違いを知り、興味をもつことができる	母国と日本の学校生活や習慣などの違いを学習する	2
	自分の考えを話そう	簡単なインドネシア語で話したり書いたりできる	決められたテーマについて、自分の考えをインドネシア語で話したり書いたりする	3
	インドネシア語で何と言うのかな？	各教科に出てくる言葉をインドネシア語に置き換える	３学期に習った学習言語をインドネシア語に置き換え、覚える	3

5　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

インドネシア語で何と言うのかな？

イ　指導目標

各教科での学習言語をインドネシア語に置き換えることができる。

ウ　指導内容・活動例

(ｱ) 母国の算数の教科書(２年生)を使って、かけ算の文章題や図形の問題に取り組む。

(ｲ) 社会で学習した方角や地図記号について、母国での表し方を調べ、表にして比べる。

(ｳ) 理科の学習言語や実験結果などを母語に置き換えて覚える。

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) 在籍学級で学習した内容の定着を図るよう支援する。

(ｲ) 母語のレベルを意識して、それぞれの児童に適した教材の選定や作成を行う。

オ　成果

(ｱ) 母語で書かれた文章に触れる機会がないので、問題を解くことで母語を読んで考えることができた。

(ｲ) 学習した事を母語で置き換えることによって、学習内容の定着が進んだ。

カ　課題

知らない母語やわからないことは辞書を使って積極的に調べているが、子どもに適した語句や例文のある辞書は、日本では入手が難しい。

かけ算と理科の実験結果を母語で書こう

(2) 事例２

ア　単元

インドネシアの文化を知ろう。調べて発表しよう。

イ　指導目標

母国の習慣や行事について知り、詳しく調べて発表できる。

ウ　指導内容・活動例

インドネシア独立記念日の行事について、由来や内容を調べる。

(ｱ) ８月 17 日の記念式典に参加する。

(ｲ) 式典の内容をおおまかに理解し、テーマを絞って詳しく調べる。

(ｳ) 独立した時やその経緯について、聞き取りしたり資料で調べたりする。

(ｴ) 式典とお祭りについて調べる。

(ｵ) 調べてわかったことを写真や映像、表などを使い全校生に向けて発表し、交流する。

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) 児童の発達段階に合わせて、調べるテーマを考えさせる。低学年はお祭りについて、高学年は母国の歴史について調べるように支援する。

(ｲ) 一方的に発信するだけでなく、他の児童と一緒に体験できる場を設ける。

オ　成果

(ｱ) 児童は、毎年深く考えずに何気なく式典に参加していたが、この学習を通して、式典の意味や母国の歴史、日本との関係などについてあらためて知ることができた。

(ｲ) 全校生に向けて発表することで、周りから大きく認められ、自信へとつながった。

カ　課題

簡単な日常会話程度の母語しか知らない児童にとっては、式典の内容は理解が難しいので、独自の習慣や文化についての深い学習は困難である。

インドネシア公館での独立記念式典

校内でのインドネシア文化発表会

6　成果

(1) 在籍学級では緊張しているが、母語教室では自分の思いを話すことができ、リラックスしてすごすことができた。

(2) 文字カードやカルタなどを作り、楽しみながら学習できるように工夫し、学習意欲を高めた。

(3) 幼少時に渡日した児童は母語を忘れ、母文化についてほとんど知らなかったが、活動を通して少しずつではあるが興味をもって取り組むようになった。また、ある程度知っている児童は、少し難しいことに挑戦する中でより詳しく知り、日本との違いなどに気づくようになった。

(4) 母語教室での学習内容や母語・母文化について全校生に発表する機会を作り、相互理解を深めた。

(5) 保護者やインドネシア領事館と連携をとり、資料提供を受け、文化交流ができた。

7　課題

(1) 母語の習得レベルに差があるので、みんなが共通して取り組める内容を工夫する必要がある。

(2) 個々の実態に応じた教材を開発し、試行して改良するには指導者、担当者ともに十分な検討時間が必要であるが、その確保が難しい。

(3) 学校の授業時数が増えると、放課後の母語教室の設定の調整が難しくなる。

(4) 実施時間や通学における安全面から、校外児童の参加が難しい。

(5) 指導者の確保が課題である。

8　効果的な教材・教具

(1) 母国の各教科の教科書

(2) アルファベット文字カード　手作りカルタ

(3) 図鑑や資料（インドネシア関連)、地図
式典の写真やビデオ

(4) アンクルン・コリンタン(伝統楽器)

(5) 国語の教科書をリライトしたもの

平成20年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
芦屋市立潮見小学校

1　支援言語：スペイン語

2　対象外国人児童の状況

(1) 渡日後２年から３年を経過する児童が多い。生活言語の習得は進んでいるが、学習言語の習得には課題がある。

(2) 家庭への細かい連絡や生活の説明等は、子ども多文化共生サポーターの支援を受けることが多い。

(3) 日本語での生活が長くなるにつれて、母語を忘れてしまいがちな状況がある。

3　事業のねらい

(1) 母語教育により、母語の学習を深めるとともに、日本語理解、学習言語の習得につながる支援をする。

(2) 母国の生活･文化に触れることで、母国に誇りを持つことができるように支援する。

4　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	スペイン語であいさつしよう	スペイン語であいさつができる	簡単なあいさつを覚え、日常的に使う	6
	スペイン語のリズムを覚えよう	スペイン語の基本的な発音ができる	学校生活の中の身近なものの名前を、発音を正しく言う	6
	ペルーの文字が読めかな？	スペインの文字と日本の漢字を比べて違いを知り、正確に発音できる	スペインの文字と日本の漢字を比べながら、正確な発音をまねる	4
	ペルーのお話を聞こう	講師の語るペルーの話から母国に興味関心を持つ	講師の話を聞きながら、母国について理解を深める	4
2学期	スペイン語の歌を歌おう	スペイン語の歌を歌うこと・楽しむことができる	スペイン語の歌の意味を理解しながら歌う	8
	食べ物について知ろう	母国と日本の食べ物の違いを知り、興味をもつことができる	母国の食べ物について調べ、日本との違いに気づく	8
	スペイン語で何と言うのかな？	簡単なスペイン語文を聞いて理解することができる	簡単な動作をスペイン語で聞き取る	6
3学期	母国の文化を知ろう	母国のお祭りや行事に関心を持つ	母国のお祭りや行事について調べる	6
	聞いてみよう 教えてあげよう	簡単なスペイン語文を使って、質問したり応答したりすることができる	自分が一番大切にしているものや好きなものについてスペイン語で話をする	6
	スペイン語で話そう	簡単なスペイン語文を理解し、表現できる	スペイン語を使ったゲームをする	6

5　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

ペルーのお話を聞こう。

イ　指導目標

ペルーの話から､母国に興味･関心を持つ。

ウ　指導内容・活動例

ペルーの一般的な特徴を理解する。

(ｱ) マチュピチュの遺跡などの古代遺跡が多くあり、たくさんの観光客が訪れる。

(ｲ) ジャガイモの原産地であり、さまざまな食べ方がある。

(ｳ) 家庭料理

(ｴ) 歌や踊りが好きな民族である。

エ　指導・支援で留意する点

幼いときに渡日した児童は、母国について知らないことが多いので、一般的なことから知らせるようにする。

オ　成果

(ｱ) 自分の生まれた国ペルーについて興味を

もって聞き、理解を深めることができた。
(ｲ) 学習への意欲を高めることができた。

カ　課題

さまざまな年齢の児童の発達段階に応じた指導方法や教材等の工夫が求められる。

(2) 事例２

ア　単元

ペルーの歌を歌おう。

イ　指導目標

スペイン語の歌を歌い、楽しむ。

ウ　指導内容・活動例

スペイン語の歌の意味を理解しながら歌う。

エ　指導・支援で留意した点

母国の歌を楽しみ、興味をもつことを大切にする。

オ　成果

(ｱ) ペルーの音楽独特のリズムにあわせて身体を動かしながら、楽しむことができた。
(ｲ) ペルーの音楽、文化への理解を深めた。

カ　課題

年齢や実態の異なる児童に、一斉に指導する歌を選ぶのが難しい。

6　成果

(1) 異年齢の児童生徒が集まり、地域のつながりが意識できた。
(2) 集会所を利用することで、地域との交流ができた。
(3) 母国が同じ人々とともに母語に触れることで、和やかな表情が見られた。

7　課題

(1) 平日の放課後は中学生の部活動があり、母語教室に参加する時間が確保ができないので、土曜日の実施を続けたい。
(2) 土曜日の実施は、周りの児童に活動が伝わりにくい面があるが、参加しやすい曜日を重視したい。
(3) 教育課程の中で、異文化に触れる機会をつくる必要がある。

8　効果的な教材・教具

(1) 『Coquito　Basico』
(2) 『Coquito　Deoro』
(3) 『Coquito　Nuevo』
(4) 『EL　Patite　encantado』
(5) 『CUENTOS　CLASICOS』
(6) 『Pulgarcito』
(7) 『EL　lobo』
(8) 『EL　CHANCHIT　VOLADOR』
(9) 『LOSCUATRO　MUSICOS』
(10) 「チャレンジミッケ No１」
(11) 「チャレンジミッケ No２」
(12) 「チャレンジミッケ No３」

母語教室の様子１

母語教室の様子２

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
伊丹市立花里小学校

１　支援言語：韓国・朝鮮語

２　対象外国人児童の状況

(1) 本校の新渡日の外国人児童は、韓国企業からの留学生の子どもである。

(2) 留学期間が過ぎると帰国する予定のため、日本での在留期間は２～３年である。

(3) 児童は、日本語指導が必要なため、教科学習に対応した母語による支援を行いながら、日本語の理解に努めるとともに、日本文化の理解が必要である。

(4) 母語、母文化に触れる体験を通して、アイデンティティの保持が必要である。

(5) 学校生活への早期適応に向け、母語による支援を行い、生活適応や学習支援、心の安定を図るとともに、豊かな日本語の表現の理解を図る必要がある。

３　事業のねらい

(1) 母語教室の活動に興味をもって積極的に参加する。

(2) 簡単な韓国語の文を聞いて理解したり、韓国語を使って会話ができる。

(3) 簡単な韓国語の文を読んだり、書いたりできる。

(4) 母語の言葉や文化に関心を持つとともに、日本語や日本文化に関心を持つ。

４　年間指導計画

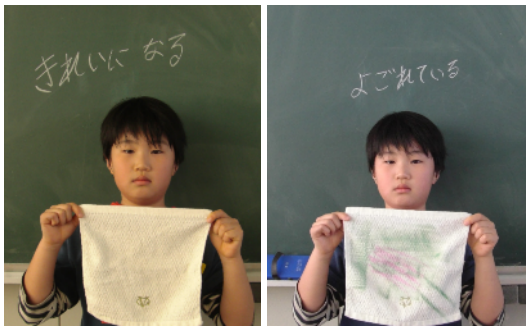
	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	韓国語でお話しよう	韓国語で簡単な会話ができる	クラスでの出来事を韓国語で話す	8
	韓国語の歌を歌おう ①	韓国語の伝統的な歌に親しむ	韓国語の代表的な童謡を知り、楽しく歌う	4
	韓国の遊びをしよう ①	韓国語の伝統的な遊びに関心を持つ	韓国の伝統的な遊びを調べたり、体験したりする	4
2学期	韓国語では、なあに？	教科書を基に学習言語の理解に努める	韓国語と日本語を対応させながら適切に言葉を使うことができる	18
	韓国の漢字・日本の漢字？	発音に気をつけながら韓国の漢字と日本の漢字の違いを知る	韓国の漢字と日本の漢字を比べ違いを知り、正確に発音する	8
	韓国語の歌を歌おう②	韓国の学校で習う歌を歌い楽しむことができる	歌詞を理解しながら歌う	5
3学期	韓国や日本の遊びをしよう②	韓国や日本の伝統的な遊びに関心を持つ	日本の伝統的な遊びを調べて韓国の遊びと比べたり、遊んだりする	5
	スピーチをしよう	簡単な韓国語で話したり書いたりできる	スピーチ原稿を韓国語で作り、色々な出来事や考えを話す。また、日本文に書き直したりする	10
	韓国や日本の文化を知ろう	韓国や日本のお祭りや行事に関心を持つ	韓国や日本やのお祭りや行事について調べる	8

５　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

「きれい→きれいになる」



汚れたハンカチと洗濯したハンカチ

イ　指導目標

「きれいになる」という形容詞の意味を理解する。

ウ　指導内容・活動例

(ｱ) 児童の前で汚れている靴やタオルを、実際にきれいにすることで「きれい→きれいになる」という表現と意味を考える。

(ｲ) 汚れた物を見せ、「きたない」「よごれている」と言う。
(ｳ) 実際に洗濯などをして、きれいにする。
(ｴ) きれいになったところで、「きれい」「きれいになりました」と言う。
(ｵ)「きたない」⇔「きれい」と板書する。
(ｶ) 「きれい」→「きれいになりました」と板書する。

エ　指導・支援で留意する点

形容詞の「い」を「く」に変化させる言葉（赤い→赤くなる）と混同しないようにするために、「きれいになる」という一つの言葉としてとらえさせることが重要である。

オ　成果

「きれい」「きれいになる」と言う概念を母語で置きかえずに、日本語で理解することが出来るようになった。

カ　課題

「大きくなる」「強くなる」など、言葉を作っていく活動とは全く別であると捉えさせることが大切である。

(2) 事例２

ア　単元

「犬（のおもちゃ・ぬいぐるみ）がある」

犬のおもちゃや生きている魚を指さす

イ　指導目標

「物＋ある」と「生き物＋いる」の違いを理解する。

ウ　指導内容・活動例

犬のぬいぐるみ等を机の上に置いて、指を指しながら「犬（のぬいぐるみやおもちゃ）がある」と言わせる。

本物の犬を指さし、「犬がいる」といわせる。

生きている水槽の魚を指さし「魚がいる」「魚がある」の２枚のカードから正しい方のカードを選ばせる。

エ　指導・支援で留意する点

韓国語では「いる」も「ある」も同じ単語を使うので、日本語で、「いる」と「ある」の使い分けを、そのまま、日本語として理解させるように指導した。

オ　成果

日本語の「いる」と「ある」の混用が多くあったが、「犬がある」の場合は、犬の【置物】を想像し、「犬がいる」の場合は、【生きている】本物の犬を想像することができるようになり、使い分けができるようになってきた。

カ　課題

韓国語で「ある」は「있다」と表記し、「いる」も「있다」と表記する。韓国語では同じ表記であるため、日本語は難しいととらえたようである。

6　成果

(1) 学校生活の中で困らないように日本語の表現力（話す・書く）を中心に指導した。そのことで、短期間で日常の生活言語を習得することができ、他の児童とコミュニケーションを取りながら生活することが可能になり、表現力も豊かになった。
(2) 多様な表現を学習することにより、生活言語はもちろんのこと、学習言語の理解とともに教科学習の力が身についた。

7　課題

(1) 「カタコト」の日本語のレベルから「センテンス」の日本語が活用できるレベルに引き上げるためには、基本的な文型と文法事項を丁寧に指導する必要があり、そのためにも授業時間の確保が重要である。
(2) 「名詞」「形容詞」「動詞」のそれぞれの語彙や文型も、母語が身についていない場合は、丸ごと日本語で覚える必要がある。
(3) 「ある」「いる」等、日本語では多様な表現がある。母語で多様な表現がないようなときは、一つのセンテンスとして指導する必要がある。
(4) 「赤くなる」「大きくなる」とちがい「きれ【く】なる」とは変化せず、「きれ【い】になる」と変化するような場合は、指導する日時や場面を変え、全く違う日本語として指導するとともに、「きれいになる」という一つの日本語として指導する必要がある。

8　効果的な教材・教具

普段身の回りにある、きれいな物やきたない物、生きている魚など。

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
小野市立河合小学校

１　支援言語：ポルトガル語

２　対象外国人児童の状況

(1) 活発に行動できるが、集中して学習に取り組むことが難しい。

(2) 学習言語の習得や家庭での学習が十分ではなく、基礎学力の定着が図りにくい。

３　事業のねらい

(1) 母国の言葉や文化に対する理解を深め、ポルトガル語の母語教室の活動に積極的に取り組もうとする態度を育成する。

(2) ポルトガル語の基本的な単語やフレーズで表現することができるよう支援する。

(3) 母語教室を通して学習言語の習得を図る。

(4) 友だちの前で自信をもって発表する態度を育てる。

４　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	母語を正しく言おう	平易な単語や文章を読む	基本的な発音ができるようにする	2
	母語を正しく読もう	語彙を確認しながら短い物語を読む	役割分担をしながら、音読練習をする	2
	母語と日本語を比較してみよう	同じ場面で、どのように異なるか考えながら表現する	場面ごとの会話例を練習後、自分のことばで表現する DVD を鑑賞しながら、文化の違いに気付く	4
	母語の文字を書いてみよう	単語を丁寧に書く	母語で書かれた物語を書写する（パソコン使用）	2
2学期	母語の歌を聴いてみよう	母語の歌を楽しむ	歌詞の意味を理解しながら聴く	4
	母語のニュースを聞いてみよう	母語のラジオニュースを聞き理解する	日本語のニュースと聞き比べながら理解を深める	4
	母語で文章を書こう	コミュケーションを取りながら文章を作る	母語と日本語を使って、オリジナル絵本を作る	6
	母国の食文化について知ろう	母国の食べ物について調べる	母国と日本の食べ物の違いについて調べる	8
3学期	文化の違いを知ろう	母国のお祭りや行事に関心を持つ	図書室などで母国のお祭りや行事について調べ、まとめる	8
	自分の考えを伝えよう	自分の国について、母語で紹介する。	自分の得意とすることや好きなことを母語で伝える	8
	母国について調べまとめてみよう	母語を正しく書く	一年間の思いを母語で書く（１年間のまとめ）	4

５　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

母語の文字を書いてみよう。

イ　指導目標

単語を丁寧に書く。

ウ　指導内容・活動例

(ｱ) 字の意味とポルトガル語を対応させながら練習し、定着をはかる。
（小 pequeno, 千 mil, 足 pe 等）

(ｲ) 色の復習をする。体の部位の練習をする。プリント（手 mao, 目 olho 等）

(ｳ) 色・身体部位の復習をする。語頭と文中の「ｒ」の発音と表記の違いに気づく。身体部位の練習をするをする。
（mau/mal, barato, rapido 等）

(ｴ) 漢字の意味とポルトガル語を対応させながら練習し、定着をはかる。
形容詞等の発音練習後、日本語と対応させて覚え、線で結んで練習する。ポルトガル語でマス目の用紙に自分で選んで記入し、ビンゴゲームの要領でお互いに言葉を言い合いながら覚える。
（美しい lindo, 醜い feio,
大きい grande, 小さい pequeno 等）

(ｵ) 生き物の名前等の練習をする。発音練習後、日本語と対応させて覚え、線で結んで練習する。
(犬 cachorro, 豚 porco, 羊 carneiro 等)

(ｶ) 野菜・果物の名前等の練習をする。発音練習後、日本語と対応させて覚え、線で結んで練習する。

(米 arroz, きゅうり pepino,
なす berinjela 等)

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) 発達段階を考慮して、個別の教材を準備し、本人の負担にならないよう学習を進める。

(ｲ) 興味や関心を高めるため、覚えた単語を使って買い物ゲームをしながら定着を図る。

(ｳ)空欄にポルトガル語を書き込む練習を多くし、定着を図る。

オ　成果

(ｱ) 最初は消極的だったが、次第に自分を出して交流していた。

(ｲ) 競い合って、楽しく多くの単語を覚えることができた。

カ　課題

課題を早く終えて、友だちとゲームで遊びたいという気持ちが強くある。この気持ちを大切にして、集中して課題に取り組めるように指導していきたい。

(2) 事例２

ア　単元

母語の歌を聴いてみよう。

イ　指導目標

母語の歌を楽しむ。

ウ　指導内容・活動例

(ｱ) ブラジルの歌の歌詞を書き、覚えて歌う。

(ｲ) ポルトガル語の DVD「Busucando a NEMO」を見る。

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) 歌のメロディーを書くことにより、歌詞の内容について理解を深めるよう支援する。

(ｲ) 歌詞が多く、歌うテンポが早いので、少しずつ分けて練習する。

オ　成果

(ｱ) 自分の国の歌なので歌いたい意欲が強かった。途中からカタカナでルビをふり歌いやすくすると、最後まで取り組むことができた。

(ｲ) DVD は字幕なしのポルトガル語で視聴したが、一度見たことのある内容なので、興味をもって見ていた。

(ｳ) ポルトガル語を書く速度が速くなった。このことを誉めるとさらに意欲を増し、ポルトガル語を書くことができた。

カ　課題

児童の興味のある歌を学習したが、歌詞の内容を理解して、上手に歌いたいという意欲が高く、繰り返して指導することが課題である。

6　成果

(1) 児童の発達段階に留意しながら、同じ教材でも与え方、取り組み方法を変える等配慮したので、学習が深まってきた。

(2) 一時帰国直後や家族と離れている間等、心理的に不安定で、学習意欲にムラがあった時は、本人の意思を尊重しながら、安定した学習環境を提供できるよう、心理的な支援を行った。そのため、保護者や児童の信頼は高くなった。

(3) 学習計画どおりに展開できない場面もあったが、臨機応変に他の教材への変更等工夫したため、興味を持続して学習できた。

(4) １年間を通じ、ポルトガル語を書こうとする意欲が大変高まり、自信につながった。

7　課題

(1) 発達段階の異なる児童の指導形態について、個別指導の時間と合同学習の時間を分ける等工夫が必要である。

(2) 母語を学習しようという意識づけを定着させるとともに、家庭との連携をとり、少しずつでも家庭学習を継続できるよう支援する。

(3) 自学自習の姿勢を保てるよう、家庭での辞書の活用をさらに指導していく必要がある。

8　効果的な教材・教具

(1) ポルトガル語の DVD「Busucando a NEMO」

(2) 『旅の指差し会話帳　ブラジル』
（情報センター出版局）

(3)『日本語を学ぶ・ブラジル語を学ぶ』（三修社）

(4) ゲーム（世界一周、トランプ、ビンゴなど）

母語教室の様子

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
姫路市立東小学校

１　支援言語：ベトナム語

２　対象外国人児童の状況

(1) 渡日歴の浅い児童は、日本語が十分使いこなせないが、母語に置き換えて考えると理解することができる。

(2) 日本語で自分の気持ちを的確に表現しにくい児童が多い。

(3) 日本生まれの児童は、保護者とベトナム語での会話ができなくなりつつあり、親子のコミュニケーションが難しくなっている。

３　事業のねらい

(1) 母語教室の活動に積極的に参加する態度を身につける。

(2) ベトナム語の基本的な単語やフレーズで表現することができる。

(3) 教科で学習した日本語をベトナム語に、日本語をベトナム語に置き換える学習を通して、学習言語の習得を図る。

(4) ベトナムについて調べ、母語に興味、関心を深める活動により、母国を誇りに思う心を育てる。

教科で学習した言葉を母語に

自己紹介をする

４　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	ベトナム語であいさつしよう	ベトナム語であいさつができる	簡単なあいさつを覚え、生活の中で使う	4
	ベトナム語のリズムを覚えよう	ベトナム語の基本的な発音やリズムをまねることができる	自分の名前や身近なものの名前を手本を真似ながら言う	4
	ベトナム語が読めるかな	ベトナム語の簡単な単語を学び、読むことができるようになる	ベトナム語の単語を読む	10
	ベトナムの文化を知ろう（食べ物編）	ベトナムの料理を通して、母国の文化を知る	ベトナムの料理を作る	6
	交流会に参加しよう	友達の輪を広げよう	交流会を通して友達の輪を広げたり、その他の国の人のことを知ったりする	10
2学期	ベトナム語の歌を歌おう	ベトナム語の歌を歌うことを楽しむことができる	簡単なベトナム語の歌を歌う	6
	ベトナムの遊びをしよう	ベトナムの遊びに関心を持ち、仲間と楽しむ	ベトナムの遊びを体験する	2
	ベトナム語で何と言うのかな	身近なベトナム語の単語を使うことができる	身近なベトナム語の単語を覚える（ベトナム語カルタを作って遊ぶ）	8
	ベトナムの文化を調べよう	ベトナムの文化について調べ、理解することで母国に誇りを持つことができる	ベトナムの文化や歴史を調べる	8
3学期	ベトナムの文化を知ろう（生活編）	ベトナムの文化を知る活動を通して仲間と支え合うことができる	ベトナムの獅子舞「ムーラン」を練習する	8
	自分の思いを伝えよう	自分を見つめ、母語で自分の思いをまとめ、語ることができる	ベトナム語で自分の思いを表現する	6
	仲間の思いを聞こう	母語で仲間の思いを聞くことができる	ベトナム語で仲間の思いを聞く	2

５　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元　ベトナム語で何と言うのかな。

イ　指導目標

身近なベトナム語の単語を使う。

ウ　指導内容・活動例

身近なベトナム語の単語を覚える。
ベトナム語カルタを作って遊ぶ。

(ｱ) 給食に出てくる食べ物を絵カードにし、色分けした後、ベトナム語を書き込む。

(ｲ) グループに分かれ、ベトナム語を聞いてカルタを取りあう。日本語を読んで、ベトナム語が言えるかグループで聞きあう。

カードを使って文を作る

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) 見本のカードを用意し、栄養教諭の指導により作成した絵カードに、高学年児童がベトナム語を書き込む際にわかりやすいようにする。

(ｲ) 低学年児童は、書くことが難しいので、出来上がったカードを使ってゲームに参加できるように役割分担する。

(ｳ) 高学年が作業をしている間に、低学年は単語を覚えるように支援する。

オ　成果

(ｱ) 身近な食べ物の名前を、カルタを作って覚え、文章を作るという活動は、学年を超えて助け合いながら取り組めた。

(ｲ) 母語の単語を日本語につなぎ、学習に使える語彙を増やすことができた。

カ　課題

(ｱ) 低学年児童は、ベトナム語を書くことがなかなかできない。

(ｲ) １年生から６年生までが全員で活動するためには、低学年児童の活動と高学年児童の活動を工夫して進める必要がある。

(2) 事例２

ア　単元　ベトナムの文化を知ろう。

イ　指導目標

ベトナムの文化を知る活動を通して、仲間と支え合う。

ウ　指導内容・活動例

ベトナム獅子舞「ムーラン」を練習する。

初めてのムーラン

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) ベトナムについて調べた中で、児童の興味や関心があったベトナムの獅子舞「ムーラン」について、ベトナム人保護者等の支援を受ける。

(ｲ) 「ムーラン」の VTR を見たり、隣接している小学校のムーランの練習を見学したりして、初めて体験するムーランのイメージを膨らまる。

オ　成果

(ｱ) 仲間と協力して一つのことを作りあげる喜びを感じ、各自が日本で前向きにがんばっていこうという思いを持った。

(ｲ) ベトナム人としてのアイデンティティがなかなか持てないでいた児童が、初めて目を輝かせて取り組んだ。

カ　課題

ベトナム生まれの児童は母国の文化を見聞きして知っていることがあるが、日本生まれの児童は母国の文化について知らないことが多い。体験活動を通して本物に触れて心が大きく揺さぶられたが、簡単にできる活動ではない。

6　成果

(1) 日本生まれの児童は、母国の文化を学び、実際に体験活動をすることで、母国に対する理解を深め、母国を誇りに思えるようになった。

(2) 母語に対する関心が少しずつ高まってきた。

(3) 母語や母文化を学びたいという思いが広がった。

(4) 高学年児童が低学年児童を助けて活動する場面が見られた。

7　課題

(1) １年生から６年生までが同じ時間に同じ活動をすることには、無理があった。

(2) 放課後の時間に集まることにかなり無理がある。授業時間数が増えると、母語教室の時間が放課後にとりにくくなる。帰りが遅くなるので下校時の安全確保が課題である。

8　効果的な教材・教具

(1)　自作カルタ

(2)　ベトナムの国語の教科書１年編

(3)　『日越越日辞典』

(4)　『旅の指さし会話帳　ベトナム』（情報センター出版局）

(5)　『食べる指さし会話帳　ベトナム』（情報センター出版局）

(6)　ベトナムの地図　ベトナム語版　　等

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
姫路市立城東小学校

１　支援言語：ベトナム語

２　対象外国人児童の状況

(1) ベトナム生まれの児童は、ベトナム語で会話はできるが、読み書きは難しい。

(2) 渡日歴が長くなってくるにしたがって日本語で会話できるようになり、母語を使いこなすことができなくなっている。

(3) 日本生まれのベトナム人児童は、簡単な母語は使えても保護者と意思疎通できるほどの母語は使えない。

３　事業のねらい

(1) ベトナム語の母語教室に積極的に参加する態度を身につけさせる。

(2) ベトナム語の基本的な言葉を使えるように支援する。

(3) ベトナム語で自分の意思が表現できるように支援する。

(4) 母語について知り、母語を誇りに思える児童を育てる。

(5) 教材で学習した日本語をベトナム語に、ベトナム語を日本語に置き換える学習を通して、学習言語の習得を図る。

音楽会でのムーラン披露１

４　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	ベトナム語で自己紹介しよう	ベトナム語で自己紹介ができる	ベトナム語で自分の名前を言ったりあいさつをしたりする	2
	ベトナム語のリズムを覚えよう	ベトナム語の基本的な発音やリズムをまねることができる	学校生活の中の身近な物の名前を、発音を正しくまねながら言う	2
	ベトナム語が読めるかな？	ベトナム語の文字を知り、正確に発音できる	ベトナム語の文字を見ながら、正確な発音をまねる	6
2学期	ベトナム語の歌を歌おう	ベトナム語の歌を歌うことができる	ベトナム語の歌を意味を理解しながら歌う	4
	ベトナム語の単語を知ろう	身近なベトナム語の単語を使うことができる	身近なベトナム語の単語を覚える	4
	母国の文化を知ろう	母国の行事や由来を知る	母国の行事について調べる	5
3学期	ベトナム語で何と言うのかな？	簡単なベトナム語を聞いて理解することができる	簡単な動作をベトナム語で指示する	4
	ベトナム語で聞いてみよう	簡単なベトナム語で質問したり答えたりできる	代わり合ってベトナム語で質問したり答えたりする	4
	ベトナム語で話そう	簡単なベトナム語を理解し、表現できる	ベトナム語で伝えたいことを話す	4

５　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

母国の文化を知ろう。

イ　指導目標

母国の行事や由来を知る。

ウ　指導内容・活動例

ベトナムの旧正月に行うムーランの連習をして、音楽会で披露する。

音楽会でのムーラン披露２

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) ベトナム人児童全員に昨年度のムーランのビデオを見せて、どうやって演技していたか思い出させ、意識を高める。

(ｲ) 獅子舞、楽器などのパートに分かれて練習し、体育館で全体練習をして仕上げを行う。

オ　成果

(ｱ) アオザイや獅子舞などの衣装をつけ、たいこの音を聞くと、児童は自然に手足が動くようになった。

(ｲ) ベトナムを誇りに思い、アイデンティティの確立につながるよい活動となった。

カ　課題

たくさんの子どもたちが役割ごとに練習するには、母語の指導者と日本語担当の教師だけでは手薄である。

(2) 事例２

ア　単元

ベトナムの歌を歌おう。

イ　指導目標

ベトナム語の歌を歌い、歌詞の内容を理解する。

ウ　指導内容・活動例

ベトナムの歌の歌詞を理解しながら歌う。

正確な発音で歌詞を読む練習

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) ベトナム語の歌詞を正確な発音で読む。

(ｲ) 歌詞の意味を理解しながら気持ちをこめて歌う。

(ｳ) 歌詞をベトナム語で書いて覚える。

オ　成果

(ｱ) 「ただいま」と家に帰るとお父さんは、「あいさつが良くできた」とほめてくださりお母さんは「いい子だね」とやさしくだきしめてくださったという「ディホッベッ」（家に帰ると）という歌を学習し、親の愛に触れることができた。

(ｲ) 歌を歌い、歌詞を丁寧に書き写すことにより、ベトナム語の単語や文がスムーズに覚えられた。

カ　課題

いろいろなベトナムの歌を歌わせたい。

6　成果

(1) 母語を学習することの意義がわかり、学習への意欲が出てきた。

(2) 保護者と児童のコミュニケーションを、母語で図ろうとする姿勢が出てきた。

(3) 母国の文化や歴史を学ぶ活動は、ベトナム人の児童にとって大きな支えとなっている。

(4) 母語教室が母語の指導者に心を開いて自分を語れる場がとなり、心の居場所となった。

(5) ベトナムを紹介するカルタ作成、ベトナムのテト（旧正月）を紹介する新聞、ムーランの披露などを通じて、母国のことを友だちや地域の人に知ってもらうことができた。

7　課題

日本生まれの児童にとっては、母語を理解し使えるようになるには時間がかかるが、今後も継続して母語教育の機会が必要である。

8　効果的な教材・教具

(1) 母語であるベトナム語の教科書

(2) 母語学習のプリント

(3) 母語で書いた歌の歌詞、テープ、ビデオ

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
姫路市立花田小学校

１　支援言語：ベトナム語

２　対象外国人児童の状況

(1) 渡日３年未満のベトナム人児童は、母語も日本語も十分であるとは言えない状況である。

(2) 日本で生まれ育った児童は増えており、ベトナム語での会話はできても、読み書きはできないことが多い。保護者との会話も日本語を交えてすることが多くなり、意思の疎通ができにくくなっている児童もいる。また、幼少で渡日した児童も同様である。

３　事業のねらい

(1) ベトナム語の母語教室の活動に参加する態度を身につける。

(2) ベトナム語での勉強に積極的に参加し、ベトナム語を学ぼうとする意欲をもつようにする。

(3) ベトナム語の基本的なフレーズで表現することができる。

(4) 正しい発音でベトナム語を話し、その言葉を正しい綴りで書くことができるなど、ベトナム語の基礎・基本を覚える。

(5) 母国の言葉や文化に関心をもち、積極的に調べようとする。

(6) 母国の言葉や文化を知ることで、母国への関心を高めるとともに、母国の良さに気付き、母語や母文化への誇りをもたせる。それにより、アイデンティティの確立をめざす。

(7) 各教科の学習で使う言葉（学習言語）をベトナム語に、ベトナム語を日本語に置き換え、学習言語の習得を図る。

(8) ベトナム語と日本語と相互に関連付け、双方の語彙を増やし、学力を高める。

４　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	ベトナム語であいさつしよう	ベトナム語であいさつができる	ベトナム語のあいさつを覚える	4
	家族の呼び方を覚えて書こう	ベトナム語の基本的な発音ができ、文字が書ける	家族の呼び方を発音を正しくまねながら言う	8
	自己紹介をしよう	簡単な自己紹介の文を作り、書いたり話したりできる	名前や年齢を正しく発音したり書いたりする	8
2学期	体の部分の名前が言えるかな？	体の部分の名称を覚え、使うことができる	歌に合わせてジェスチャーゲームをする	8
	果物の名前を覚えよう	好きな果物の名前を覚え、使うことができる	ベトナム語を使って買い物ゲームをする	8
	食べ物の名前を覚えよう	ベトナムの食べ物の名前を覚えて、使うことができる	ベトナム語を使って買い物ゲームをする	8
3学期	動物の名前を知ろう	ベトナム語で動物の名前を覚えて、使うことができる	ベトナム語を使ったビンゴゲームやベトナム語かるたをする	8
	建物の名前が言えるかな？	主な建物や施設の名前を覚えて、使うことができる	建物の名称を正しく発音したり書いたりする。	8
	道順を教えよう	道順を表す言葉を覚えて、使うことができる	実際に地図を見ながら案内ゲームをする	8

５　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

動物の名前を知ろう。

イ　指導目標

ベトナム語で動物の名前を覚えて、使うことができる。

ウ　指導内容・活動例

ベトナム語を使って、ビンゴゲームやベトナム語カルタをする。

エ　指導・支援で留意する点

書く活動を重視し、ベトナム語で動物の名前を書かせる。そして、それを読むことで読み書きの力をつける。

オ　成果

ベトナム語での読み・書きをすることで、ベトナム語の基本を楽しみながら学ぶことができた。

カ　課題

単語を覚え、読んだり書いたりすることはできたが、それを使って教科学習へ広げていくことは難しい。どのようにして教科学習へつなげる指導方法の工夫が課題である。

(2) 事例２

ア　単元

家族の呼び方を覚えて書こう。

イ　指導目標

ベトナム語の基本的な発音ができ、文字を書くことができる。

ウ　指導内容・活動例

家族の呼び方を、発音を正しくまねながら言う。

エ　指導・支援で留意する点

自分の家族について語り、質問したり質問に答えたりする中で、語彙を増やすようにする。

オ　成果

(ｱ) 家族だけでなく、自分の好きな物や食べ物などを織り交ぜて話をすることができた。

(ｲ) 渡日まもない児童はベトナム語で話し、日本生まれの児童がそれを日本語に訳すことで、ベトナム語・日本語双方を習得することができた。

カ　課題

日本語との関連のある内容にするように指導の展開を工夫する必要がある。

6　成果

(1) ためらわずに母語で話せる場ができ、児童、特に渡日間もない児童の心の安定を図ることができた。日ごろ母語で話すことが少なくなってきた児童にとっても、母語を保持することができた。

(2) 渡日間もない児童は、母語から日本語を覚え、滞日年数の長い児童は、日本語から母語を覚え母語と日本語の両方を習得する機会となった。

(3) 日本語とベトナム語の似ているところを発見し興味をもつなど、ベトナム語を学習しようという学習意欲を高める機会となった。

(4) ベトナム語の文字を読めるようになり、簡単な単語を書けるようになった。中には、ベトナム語で書いてある本が少し読めるようになった児童もいた。

(5) ベトナム語の学習や、ベトナム語で学習をすることで、ベトナムの文化にふれ、アイデンティティをはぐくむことができた。

7　課題

(1) 自分から積極的に参加しない児童への働きかけが必要である。このような児童が一番アイデンティティを喪失している可能性がある。

(2) 家庭での母語による会話を支援する。家庭で母語を話さなくなると、親子の絆である母語を喪失することになる。その場合、保護者とのコミュニケーションが難しくなったり、日本語を話さない親を疎ましく思ったりする児童もいる。親を尊敬し、親子のコミュニケーションのために、家庭では母語を話し、親に母語を教わる機会が必要である。

(3) 母語のレベルが異なる多数の児童が在籍しているので、一人の指導員が指導するのは困難である。母語を指導できる指導員の確保や、複数の母語教室に分けて実施することが大切である。

8　効果的な教材・教具

(1) 『旅の指さし会話帳　ベトナム』（情報センター出版局）

(2) ベトナム語カルタ（英語カルタにベトナム語を貼ったもの）

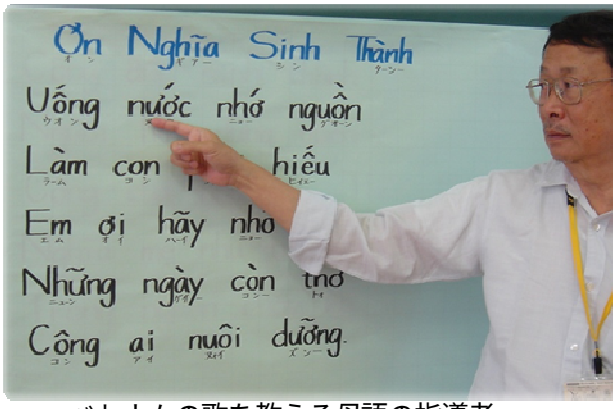
(3) ベトナム語の絵カード

(4) オーストラリアやアメリカで使われているベトナム語学習のための教科書

『CON TIM VIET NAM』

『EM HOC TIENG VIET』

(5)ベトナムの歌集



ベトナムの歌を教える母語の指導者

（家族への感謝の気持ちを歌った歌）

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
姫路市立東光中学校

１　支援言語：ベトナム語

２　対象外国人生徒の状況

(1) 母語教室には、幼い時に渡日した生徒と、日本で生まれ育った生徒がいる。
(2) 日本語は堪能で日常会話も十分にこなすが、ベトナム語があまり理解できない生徒が多い。
(3) 簡単なベトナム語は話せても書いたり読んだりするのは困難な生徒がいる。
(4) ベトナム語しか話せない保護者とのコミュニケーションがとりにくい面が見られる。

３　事業のねらい

(1) 母語教室への積極的参加によって、母国の言葉や文化への関心を高める。
(2) ベトナム語の基本を学び、文章を読んだり、書いたり、話したりできる。
(3) ベトナム語で家族と会話ができる。
(4) 日本語の内容をベトナム語に、ベトナム語を日本語に置き換え、学習言語の習得を図る。

ベトナム語の教科書（事例１）

４　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	母国を知ろう	母国や母語に対する基礎知識を持つ	母国の紹介 簡単なあいさつを覚える	6
	発音を身に付けよう	発音記号を読むことができる	ベトナム語の発音を正しく聞き取りまた発音する	8
	自己紹介をしよう	ベトナム語で正しく自己紹介ができる	自分のことや家族のことをベトナム語で紹介する	8
2学期	言葉を覚えよう	身のまわりの単語や日常用語を覚える	辞書、日常用語集などを活用し、ベトナム語の語彙を増やす	8
	母国の生活や習慣等を知ろう	母国の生活や文化等について関心を持つ	母国の生活や文化等を調べ、日本との違いを考える	8
	ベトナム語の本を読もう	ベトナム語で書かれた本を正しく読み、内容を理解する	ベトナム語で書かれた本の内容を理解し、感想を発表する	8
3学期	ベトナム語で作文を書こう	自分でテーマを決め、ベトナム語で作文を書くことができる	自分の関心のあること、思い等をベトナム語で書く	8
	ベトナム語でスピーチをしよう	ベトナム語でまとめ、正しい発音で発表できる	ベトナム語で書いた作文をもとにベトナム語で発表する	8
	ベトナム語に置きかえよう	日常用語、会話をベトナム語に置きかえることができる	色々な言葉や日常会話をベトナム語に直すことができる	8

５　母語指導教育支援事例

(1) 事例　１

ア　単元

言葉を覚えよう。

イ　指導目標

身の周りの生活言語を覚える。

ウ　指導内容・活動例

辞書や日常用語集等を活用し、ベトナム語の語彙を増やす。

エ　指導支援で留意する点

生徒によりベトナム語の理解度の差が大きく、それに配慮し指導する。

オ　成果

身の周りの基本的な言葉を理解した。

カ　課題

正しい発音や表記が難しい。

(2) 事例２

ア　単元

母国の生活や習慣等を知ろう。

イ 指導目標

母国の生活や文化等について関心をもつ。

ウ　指導内容・活動例

母国の文化について関心と誇りを高める一環としてムーランを行う。

エ　指導支援で留意する点

知識だけでなく体感することから母国の文化に一層の興味をもたせる。

オ　成果

小学生と協力し、ムーランを踊ることにより、母文化への興味・関心が深まった。

カ　課題

多様な文化や習慣に触れることにより、アイデンティティを高めていく。

小学生と共にムーランを踊る中学生１

6　成果

(1) 身のまわりの言葉をベトナム語、簡単な文を訳すことができる生徒が増えた。

(2) ベトナム語で話すことはあまりできないが、ベトナム語を聞き、ある程度理解できるようになった。

(3) ベトナムの文化への関心が高まった。

7　課題

(1) 母語教室は週１回なので、定着しにくい面がある。

(2) 生徒の状況に応じた教材の開発。

(3) 放課後の部活動、教科学習の優先順位が高く、放課後の母語教室へ参加しにくい生徒がいる。

(4) 母語学習の意義を理解し、アイデンティティを高める取組が大切である。

8　効果的な教材・教具

(1) ベトナム語の教科書

(2) ベトナム語の練習帳

(3) 絵で学ぶ日本語入門　　ベトナム語版

小学生と共にムーランを踊る中学生２

平成２０年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践事例
姫路市立花田中学校

１　支援言語：ベトナム語

２　対象外国人生徒の状況

(1) 小さいころから日本で暮らしている生徒は、日本語の日常会話は習得しているが、学習言語の習得は十分でない生徒が多い。

(2) 母語であるベトナム語はほとんど使っていないか、家で少し使っている程度の生徒が増えている。特に、母語を話すことができても、読み書きができない生徒が多い。

３　事業のねらい

(1) ベトナム語の母語教室の活動に積極的に参加する態度を身につけさせる。

(2) ベトナム語の基本的な単語やフレーズで表現することができる。

(3)　母国の言葉や文化に関心をもち、積極的に調べようとする意欲を高める。

(4) 各教科で学習した言葉をベトナム語に、ベトナム語を日本語に置き換え、学習言語の習得を図る。

４　年間指導計画

	単元名	指導目標	指導内容・活動例	時数
1学期	ベトナム語であいさつしよう	ベトナム語であいさつができる	ベトナム語のあいさつを覚える。	4
	自己紹介をしよう。	簡単な自己紹介の文を作り、書いたり話したりできる。	名前や年齢を正しく発音したり書いたりする。	8
	歌を覚えよう	ベトナム語の歌を覚え、うたうことができる	ベトナム語の歌を覚える。	3
2学期	ベトナム語のアルファベットを覚えよう	ベトナム語のアルファベットを覚える	ベトナム語のアルファベットを覚える	8
	ベトナム語で自分の家族を紹介しよう	簡単な自己紹介の文を作り、書いたり話したりできる	名前や年齢を正しく発音したり書いたりする	8
	ベトナム語の地理や歴史について学習しよう	地名、歴史の名称などを書いたり、読み取ったりできる	地名、歴史に関する文章の内容などを読み取る	8
3学期	ベトナムと日本の習慣の違いについて考えよう	ベトナムと日本の習慣の違いがわかり表現できる	ベトナムの行事、日本の行事を比較する	8
	ベトナム語で書かれた文を読もう	ベトナム語の簡単な文章を読み取ることができる	ベトナム語の物語などを読む	8
	教科で学習した言葉をベトナム語に置き換えよう	教科書の日本語をベトナム語で置き換えることができる	教科書を使ってベトナム語に翻訳してみる	8

５　母語教育支援事例

(1) 事例１

ア　単元

ベトナムと日本の習慣の違いについて考えよう。

イ　指導目標

ベトナムと日本の習慣の違いを理解し、表現することができる。

ウ　指導内容・活動例

(ｱ) ベトナムと日本の食事を調べる。

・ベトナムにしかない食材、日本にしかない食材

・ベトナムにも日本にも共通する食材

・ベトナム料理、日本料理の作り方

(ｲ)「私の好きなベトナム料理、日本料理」を発表する。

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) 食事など非常になじみやすい題材を取り上げる。

(ｲ) 実物を提示することが望ましいが、いろんな食材をそろえるのは難しいので、中学校家庭科の教科書や図書館の本、『そのまんま献立カード』（中学校家庭科の教材）などを利用して実物に近い写真などを用意し、イメージをもたせる。

オ　成果

昼食の時間などに友達同士でお弁当の中身を見ながら、覚えた食材の名前などを確認しあっている姿がみられた。身近なものからベトナムと日本の違いや同じ点、言葉などに興味をもつことができた。

カ　課題

食文化以外の内容も取り上げ、双方の文化や習慣への理解を深めるようにする。

(2) 事例２

ア　単元

教科で学習した言葉をベトナム語に置き換えよう。

イ　指導目標

各教科で学習した言葉をベトナム語に置き換えることができる。

ウ　指導内容・活動例（地図の読み取り）

(ｱ) 中学校社会科（地理）の教科書の日本語の文章をベトナム語に訳し、理解する。

(ｲ) 白地図に地名、地形などを日本語、ベトナム語両方で記入して完成する。

エ　指導・支援で留意する点

(ｱ) 地図や資料などで理解がしやすく、語彙力が少なくても取り組みやすい社会科地理分野から取り組む。

(ｲ) 地図、地球儀など目に見えて理解しやすいものを準備する。

オ　成果

地理の教科書の内容をベトナム語に訳す作業を通して、学習言語の内容理解を深めた。

カ　課題

語彙を増やしながら、図などが少なく、言葉のみで思考する教科（国語、歴史など）に関しても、言葉の置き換えが抵抗なくできるようにしたい。

6　成果

(1) 簡単な挨拶を覚え、日常でも挨拶ができるようになってきた。

(2) テキストの学習に取り組む中で、読むこと、書くことが少しずつ身についてきている。

(3) ベトナム、日本、それぞれの文化・習慣に興味を持つことができた。

7　課題

(1) ベトナム語を話すことに比べ、読む・書くことができない生徒が多いので、今後は書くことに重点を置いた学習方法を工夫したい。

(2) ベトナム人生徒が多数在籍しているが、その中で母語教室に参加する生徒は多くない。その原因として、時間帯が放課後のため、部活動との兼ね合いもあって参加しにくいことや、ベトナム語の学習に対する意識が高まっていないことがあげられる。

(3) ベトナム語の習得レベルに差があるので、個々の習熟度に応じた学習を計画する必要がある。

(4) 子ども多文化共生サポーターと連携しながら、各教科で学習した言葉をベトナム語に置き換えるなど、授業との関連をもたせながら、ベトナム語学習を進めていきたい。

8　使用した教材・教具

(1) 『Ｔｉｅｎｇ　Ｖｉｅｔ』

(2) 『Ｅｍ　ｈｏｃ　ＴＩＥＮＧ　ＶＩＥＴ』

(3) 『ｃｏｍ　ＴＩＭ　ＶＩＥＴ　ＮＡＭ』

(4) 各教科の教科書

(5) 『そのまんま献立カード』（中学校家庭科の教材）

参考資料

＜論文１＞

外国人児童生徒への母語教育支援の重要性について

－兵庫県の母語教育支援事業に関わって－

大阪大学世界言語研究センター　准教授　真嶋潤子

１　はじめに

兵庫県教育委員会によって、平成 18 年度から３年間「新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業」が展開されてきたが、縁あって 19、20 年度の２年間関わる機会を得た。年３回、通算６回の「母語教育支援センター校等連絡会」（以下「連絡会」という。）において私見を述べる機会を得、また現場で尽力しておられる教頭先生や担当の教員、母語の指導者の方々、また市町教育委員会の担当の方々の貴重なご経験やお考えを伺う機会を得た。

日本全国で「新渡日（ニューカマー）」とよばれる外国人児童生徒の数は増加傾向であり、平成 20 年末来の不況により悪化した雇用状況のため帰国する家族も多いので頭打ち感はあるものの、外国人児童生徒への教育の重要性は減るどころか増大していると言えよう。

小稿では、「連絡会」での講義内容をもとにしながら、現場の声や取組実践の評価も含め、外国人児童生徒への母語教育の重要性や在り方に関して振り返ってみたい。これが、今後の方向性を考える資料となれば幸いである。

２　新渡日の外国人児童生徒の現状

新渡日の外国人児童生徒への言語教育は、これまで日本ではこれほどの規模で直面することのなかった新しい状況である。日本の教育施策の拠り所である「教育基本法」にしても「国民の教育」を想定しているので、外国人児童生徒はそもそも対象外、範疇外であり、行政の施策は必ずしも積極的とは言い難い。

兵庫県教育委員会において、「新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業」として正面から取り上げ、行政主導型で取り組んできたという先進性は特筆に値する。というのも、「日本語指導」はされても、外国人児童生徒の「母語の指導」は、家庭任せにしているところが多く、自治体によっては、地域のボランティア団体等に実施の依頼をしているところも多いからである。

兵庫県教育委員会が平成 12 年に策定した「外国人児童生徒にかかわる教育指針」には、以下のように記載されている。

「多文化共生の視点に立って、外国人児童生徒の自己実現を図ることを支援するとともに、すべての児童生徒が互いを尊重し合い、多様な文化的背景をもつ外国人児童生徒と豊かに共生する真の国際化に向け、「人権教育基本方針」に基づき、外国人児童生徒の人権にかかわる課題の解決に取り組むため、指針を策定する」

外国人児童生徒が日本の教育現場に来た時に、日本語教育だけでなくその子どもの「母語」教育の支援をすることが「人権」に関わることであるという判断がなされたところに、本県の先進性が伺える。というのも、「母語を学び使う権利」というのは、「言語権（Linguistic Human Rights）」として、基本的人権の一部であるという考え方が欧米を中心に近年受入れられ始めており（渋谷、小嶋　2007；Phillipson 2000）、またいわゆる「子どもの権利条約」でも言及されている（第 29 条）重要な概念であるにも関わらず、日本国内ではまだ定着しているとは言い難いからである。

3　母語教育支援の基本的考え方

外国人児童生徒の母語教育を支援することの意味は何だろうか。「日本に来たのだから、母語を使わず日本語だけ使うべきだ」とか「日本語ができない外国人なのだから、日本語さえ教えたら良い」という考えがあったり、「家庭で母語で話をしているから、日本語が上達しない。家庭でも日本語を使いなさい」という学校の指導があったりすると聞くが、どう考えたら良いだろうか。何故日本にいるのに日本語だけでなく母語教育も支援する必要があるのだろうか。

ここで「子どもの全人格的教育」ということを考えておきたい。外国人児童生徒にとっては、自分の継承する母語と母文化と、新たに身につける日本語や日本文化を合わせた総体が全人格なのである。日本にいるから日本語だけ、というのでは全人格的な健やかな育成につながらないのではないだろうか。どの子も持てる能力を充分に伸ばす機会を与えられ、健やかに生き生きと育ってほしいという願いを実現するためにも、全人格的な教育の在り方を多様な子どもに合わせて考える必要があるだろう。

その根本には、われわれが目指す社会の有り様についての考え方がある。「平和で安全で、全ての市民・構成員が安心して暮らせる社会・地域コミュニティーのため、また共によりよく生きていくため」とマクロに捉えてみてはどうだろう。同様のことは、いみじくも本県教育委員会「人権教育の在り方について」（報告）（平成９年 11 月）に強調されている。

> 共生の視点・・人権教育を考えるにあたっては，すべての人と人との「共生」という視点を重視するべきではないか。そのためには，まず，外国人と日本人の共生，女性と男性の共生，障害がある人とそうでない人の共生，自然と人の共生など直面する具体的な課題に取り組み，「共生」をお互いの幸せをもたらす価値観として認識させることが大切だと思う。（兵庫県教育委員会事務局人権教育課HPより http://www.hyogo-c.ed.jp/~jinken-bo/konwakai.html　参照。下線は筆者。）

したがって、新渡日の外国人児童生徒についても、母語や母文化を忘れて日本に「同化」することを強要するようなあり方ではなく、違いを大切にできる環境整備を進めると共に、どの子どもも自分のよりどころとしての母語や母文化を大切にし、自己肯定感を育み、日本社会に「適応」して「共生」することができるよう、制度としても支援しようとしたことの一例が、本事業であると理解できる。

4　母語教育支援の意義

ここで具体的に、外国人児童生徒にとっての母語教育支援の意義を列挙しておきたい。

(1) 認知力の育成のための母語能力

人間は言語を使って考えることを身につけるが、その思考基盤がある母語力を伸ばすことによって、認知力がつき、それは日本語での学習にも応用できる力となるはずである。カミンズの「相互依存仮説」によると、バイリンガルの個人は、２言語の認知と記憶は相互に共通していると言われている。

言語形成期の児童生徒にとって、言語能力の伸長と認知力の育成は極めて強い相互関係にあるのである。しっかり物事を把握し、関係性をつかみ、物事や心情のありようが推測できるようになり、考えや意見を述べ、議論できるようになるといった一連の認知行動は、言語なくしてはあり得ない。これは日本語を母語とする日本人児童生徒（単一言語話者）においてすら、できるようになることは容易ではない。ましてや外国人児童生徒に、すぐに日本語での認知活動を求めても困難をきたすことは、火を見るより明らかである。母語教育支援のあるところで、母語での理解を深めながら日本語の理解を促していくと、時間は単言語話者よりも長くかかるが、長期的にはよい結果を生む可能性が高い。

(2) 日本語能力の伸長にも役立つ母語教育

２言語の同時発達が、子どもの言語習得には有利であり、２言語の力は相互に影響し

合うので、学校で母語教育支援を行うことは学習言語である日本語の習得にも役に立つ。逆に母語を否定されると、子どもの学習の基盤が崩れてしまいかねないということが、バイリンガル教育の研究で明らかになってきている。（カミンズ 2006）

(3) 自己肯定感やアイデンティティ確立のため

外国人児童生徒にとって母語や母文化は、自分が依って立つルーツである。母国や母文化について理解を深めることにより、日本で育つ子どもたちが「自分は何者なのか？」というアイデンティティを確立する際に重要な役割を果たす。また母語や母文化に触れる体験により、自己肯定感が促進され自尊感情を持てるようになり、情緒的安定とアイデンティティの確立を促進できる。

(4) 家族との絆

母語は、同時にその母語話者である保護者とのコミュニケーションの道具でもある。日常的なコミュニケーションのみならず、文化や価値観を継承し、また自国にいる親戚も含めた親族との大切な絆であろう。これは(3)のアイデンティティとも密接に関係し、母語教育支援をすることで子どもにとってはより強固で安定した心理的発達を遂げることができると言える。

(5) 権利としての母語保障

前述したように、母語を学び話す権利は、基本的人権であり尊重されるべきものとの考え方が広まりつつある中で、兵庫県の外国人児童生徒への母語教育支援は、その考えに叶っている。

(1)と(2)は、母語も日本語もできるバイリンガルに育つ積極的意味合いであり、(3)(4)は、学習意欲や生きる意欲にも重要なことである。

母語の言語形成期はだいたい10～12歳位までだと言われているが、その初期あるいは途中で来日した子どもの場合は、母語が確立しておらず、非常に不安定である。そこで母語保持・母語教育を行わず、社会的多数派の日本語だけを教えると、多くは１年程度で基本（生活）会話能力（BICS）は身につき、流暢に日本語が話せるように聞こえる場合が多い。その場合でも、学年相当の学力を支える学習言語能力（CALP）が身につくためには５年程度かかると言われている（前掲書；中島 2001）。一方、基本会話のレベルでも母語も不十分、日本語も不十分で、何語によってもコミュニケーションの取れない、いわゆる「ダブル・リミテッド」（「セミリンガル」という言葉は差別的だとして避けられることが多い）の状態に陥る事がある。ダブル・リミテッド状態の子どもは、自己表現する言語を持たないという意味で、非常に大きな困難を抱えてしまう。また、たとえ日本語が上達してコミュニケーションが取れるようになった場合でも、思春期になると自分より日本語理解が不十分な親を尊敬できなくなったりしておこる家庭不和や、自分が何者なのかわからなくなるというようなや「アイデンティティ危機」に直面するということも珍しくない。これらは母語を教えないことで起こりうる負の側面である。

5　母語教育支援の方向性

次に、母語教育支援の方向性として重要な項目を挙げたい。

(1) 母語伸長の上に、日本語能力（生活言語・学習言語）の獲得

子どもの状況は一人ずつ異なると言って良いほど多様であるが、母語能力を保持するだけでなく、読み書き能力をつけていく方向で指導するのが望ましい。それによって長期的には、両言語での識字力も持つ「バイリテラル」に育つ可能性ができる。

(2) 認知力の育成

子どもが言語能力をつけるということは、単に単語や文字を覚えて終わるということではない。言語を使ってものを考える認知力を育成したい。母語能力や年齢等によって異なるが、母語で認知力をつける方向で指導することを心がけたい。読み聞かせや、黙

読をした後、読んだ内容を話す、それを書いてみるなど、リテラシー（読み書き能力）育成が期待される。

(3) 母語教室と在籍学級との協働・連携

母語教育支援は、単に当該の外国人児童生徒さえ良ければ良いというものではない。また、母語教室のみで完結しうるものでもない。可能な限り、母語教室と在籍学級（原学級）の担当者が連携し、その子の居場所を在籍学級に確保できるような工夫をしたり、日本人クラスメートとうまく相互理解できるような取組がなされるのが望ましい。日本人児童生徒にとっても、外国人児童生徒が「お客さん」「お荷物」等にならないよう、学びを豊かにする取組の工夫が求められる。

(4) 環境整備と個人と組織の積極的なかかわり（コミットメント）

外国人児童生徒の教育全般を考えた時に、母語教育支援も日本語指導も、教室の中で終わるものではない。担当教員や母語の指導者だけでなく、ほかの教員、保護者、地域の住民などは、様々な形で教育に関わり得る「環境」であるので、子どもの教育に理解を示し積極的に関わりを持つ（コミットする）個人や組織（大使館等を含む）とのネットワークを構築することが望ましい。

6　事業の成果と課題

筆者が関わったこの2年間について、実践事例や意見交換などを通して得た本事業の成果と課題について触れておきたい。

平成19年度は20校、20年度は17校のセンター校で7言語の母語教育支援が実施されてきた。予算や施設、時間的な制約等がある中で、関係者の献身的な尽力（コミットメント）により、かなりの成果が上がるとともに、いくつかの課題が残ったようである。大きく(1)体制づくりと(2)指導方法、(3)総評に分けてまとめたい。

(1) 体制づくり

ア　全てのセンター校で、母語教育支援の意義とねらいは理解されているようである。

イ　母語教室の運営に、時間的問題（子どもがセンター校に通うのに支障があるなど）、安全確保の問題（子どもが近隣校からセンター校へ通うのに、誰が引率するのか）、予算的制約の問題（将来的に縮小の不安）などが挙っている。

ウ　ネットワークが充実することが望ましい。特に保護者との連携がうまくいっているところと、不十分なところで、成果にも違いが出ている。また地域の住民やイベントと連携できると成果が出る傾向にある。

(2) 指導方法

ア　母語能力が伸び、それが自信につながったり、日本語習得にもつながったという報告が何校からもあった。

イ　母語や母文化に触れる体験をさせるために様々な工夫がなされている。成果があったところは、子どもが「生き生きして」おり、自尊感情やアイデンティティの確立にプラスに働いている。

ウ　母文化を代表するような民族衣装や楽器などの実物や映像、音楽など、教材や教具にも工夫がこらされている。

エ　系統だったカリキュラムの整備が必要なところがある。

オ　適当な教材が不足しているという声が多くある。

カ　母語教室に異年齢の、しかも能力も異なる子どもが集まるので、個に応じた指導が難しいという声が多い。

(3) 総評

全体として見ると、自己肯定感やアイデンティティの確立につながるような働きかけが多くなされており、その効果が上がっている。多くの子どもたちにとっては、在籍学級では緊張しているが、母語教室ではリラックスできて生き生きした表情を見せている

が、一方で母語教室に来たがらない子どもへの対応に苦慮している例もある。この点については、外国人集住地域ではまだしも、分散地域の外国人児童生徒にとっては、日本人への同化圧力が大きく、「みんなと違う」ことを明示する母語学習への積極的参加意欲が持ちにくいということは、指摘しておきたい。

母語能力については、読み書き能力の不振が特徴的である。また母語と日本語の能力評価まで至っていないところがほとんどであり、担当者の主観的な把握に頼っているのが実情である。

本事業が始まってまだ３年であり、担当者が変わったり、子どもの出入りが多かったり、様々な状況変化に対応するだけで大変なところも多いようである。母語教育支援の母語教室と言っても、原則的に週１回であり、実施回数は多いとは言えない。しかしながら、「最初は週１回ぐらいやっても、意味がないだろうと思っていたのに、１年もたつと子どもの母語が本当に伸びてびっくりした」という声もあり、「継続は力なり」ということが示され、母語の支援なしに日本語だけの教室（サブマージョン環境）に放置して母語喪失に任せるといった全国的によくある状況と比べれば、その効果は明らかであると言える。

また、日本人児童生徒も、異なる母語・母文化を持つクラスメートの存在により、異文化理解が促進されることや、（英語以外の）外国語に興味を示すことなどの教育的効果が報告されている。その他にも、差別せず共生しようとする態度が養われるなどの効果もあらわれている。

7　今後の課題

このような成果と課題をふまえ、今後の在り方を考えてみると、基本的にはこれまでの実践を継続し、さらに充実させていくことが必要である。母語教室運営等の予算その他の変化があったとしても、子どもたちの学びは中断すべきではない。大変ではあるが、地道に何とか継続し、母語教育支援を受けた子どもたちの中期的、長期的変化が効果となって現れることを是非知りたいと思う。その上で、以下に具体的課題を挙げてみる。

(1) 評価方法の確立

母語教育支援の具体的効果を検証するような評価方法ができるのが望ましい。必ずしも点数化できなくても、質的評価の可能な「ポートフォリオ評価」も可能である。すでに、一人ずつのポートフォリオを作って記録している学校もある。継続的・長期的に学びの成果を評価できるような「形成的アセスメント」と呼ばれる多角的評価の結果を残していくことで、子どもの能力評価だけでなく、プログラム評価としても多面的複合的な評価が可能である。

(2) コミットメント

直接の担当者のみならず、在籍学級の担任、校内の教職員全体の理解とかかわり（コミットメント）をどのように増やしていくかということが課題である。また保護者との連携、地域との連携も非常に重要であるが、兵庫県のセンター校の中には、かなりの成果をあげているところも見られた。成功例を、そこだけで留めず、センター校間の情報交換や、コミュニティーへの情報発信など、新渡日の外国人児童生徒の母語教育支援の重要性を認知してもらえるような工夫が望まれる。

(3) 実践経験の共有

支援体制の充実したセンター校から、母語教育支援のカリキュラムの充実や、教材開発による知識や情報の蓄積をし、その取組が継続され継承されていくのが望ましい。予算その他、難しい条件があることは理解できるが、子どもたちの言語の習得は後でまとめてやるのではなく、継続的に実施することが求められている。それは深く人権（言語権）に関わる問題でもあるので、一人の子どもも無視されることのないようにすることが周りの大人の責務ではないだろうか。

８　おわりに

外国人児童生徒は、日本の学校において「日本語のできない子」「問題をおこしやすい子」だとする見方もあるだろうが、「母語の〇〇語のできる子」「教室を豊かにしてくれる子」という見方こそが大切なのではないだろうか。

親の都合で日本に来ることになった外国人児童生徒は、それまでの母国の環境から引き離され、不安で不自由な生活に適応することを求められる。日本語しか通じない教室に入れられる（サブマージョン環境）場合、外国人児童生徒の直面する不安や緊張、ストレスは並大抵ではない。子どもたちは、持てる力を全部使って、日本語を吸収し、環境に適応しようとするが、「日本語のできない子」「日本の習慣の分からない子」「できない子」という経験ばかりをしていると、「自分自身に負の評価をする傾向」（榎井 1998）を持ってしまう。「〇〇語のできる子」であり「〇〇国のことをよく知っている」という「違い」の積極的な面と、「母語を大切にして２つの言葉を身につけるのは、とても大変だが素晴らしいこと」であると、マジョリティ（多数派）の日本人児童生徒にも認識できるようにすることが大切だろう。多様な言語背景を持つ子どもたちの「居場所」を作り、「自己肯定感」を持たせ、「自尊感情」を育むためにも、母語教室や母文化理解の機会を継続的に与えていく事は非常に重要だと言える。

できないところ、ないところを数え上げるだけでなく、できること、違った能力を評価し、存在する事を肯定的に受け止める態度が受入れ側の我々には非常に大切だと思う。「大事にされていると感じた子ども」は、将来他人を大事にすることのできる大人になってくれるのではないだろうか。

本県で３年間取り組まれた母語教育支援事業は、その恩恵を受けた子どもたちが母語での認知力と情意面での安定を基に、学習言語である日本語習得の効果も促進することができ、多文化共生社会の立派な担い手に成長してくれるという夢につながる取組である。グローバル化した現代において、非常に重要な施策であると考えられる。

参考文献

榎井緑（1998)『「ニューカマー」と呼ばれる外国人の子どもたちの現状』解放出版社

カミンズ、J.／ M.ダネシ著　中島和子／高垣俊之訳（2005)『カナダの継承語教育　−多文化・多言語主義をめざして-』明石書店

カミンズ、J.（中島和子・湯川笑子訳）（2006)「学校における言語の多様性　−すべての児童生徒が学校で成功するための支援−」MHB 研究会第９回研究会講演資料

渋谷謙次郎、小嶋勇（2007)『言語権の理論と実践』三元社

田尻英三／田中宏／吉野正／山西優二／山田泉(2007)『外国人の定住と日本語教育 増補版』ひつじ書房

中島和子（2001)『バイリンガル教育の方法　−12 歳までに親と教師ができること−増補改訂版』アルク

バトラー後藤裕子（2009)「日本語学習児童生徒教育への提案　-アメリカ合衆国の経験を踏まえて-」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』５号　MHB 研究会　pp.1-21.

Phillipson, R. (2000) *Rights to Language: Equity, Power, and Education: Celebrating the 60th Birthday of Tove Skutnabb-Kangas.* Lawrence Erlbaum Assoc. Inc.

＜論文２＞

母語教室の運営のあり方について― 実践から見えてきたこと ―

京都大学国際交流センター非常勤講師　櫻井千穂

１　はじめに

筆者は、この「新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業」の開始当初から、母語教室支援センター校のひとつである神戸市立本庄小学校の母語教室の運営に携わった。そして母語教室のカリキュラムを構築するために、2006 年 8 月に開催された母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究会の「学齢期(K-G12)の子どものための多読教材開発ワークショップ」に参加し、全国からの参加者と共にシラバス(授業計画)試案を作成、その後、教科書を刊行した。本稿では、それらの経験を踏まえ、母語教室を運営するにあたり、重要な点を述べたい。

２　趣旨の共通理解の重要性

母語教室の運営にあたって第一に大切なことは、母語教育支援の趣旨の共通理解を図ることである。移民の子どもに対する教育で数々の成功をおさめているカナダでの母語教育について書かれたカミンズ・ダネシの『カナダの継承語教育-多文化・多言語主義をめざして-』(2005) (訳中島･高垣)には、「子どもが保育園・幼稚園、小学校、中学校、高等学校を通じて自らの言語や文化は校門のところに置いてはいるべきものという明白なメッセージを受け取るとき、教育制度はその子の全人教育を否定したことになる」(p.91)と述べられているが、これは、マイノリティ(少数派)の言語や文化は積極的に保持しようとしなければ、そのルーツをもつ子どもたちの健全な育成をも阻害してしまうことにつながるということを意味している。

母語教育支援事業実施要項(2008)にも記載されている通り、事業の趣旨は、母語を思考基盤とする新渡日の外国人児童生徒に対し、学習言語の習得を支援することであり、母語・母文化にふれる様々な体験をとおして、当該児童生徒のアイデンティティの確立を支援することにある。この趣旨を理解した上で、支援に携わるすべての人間が、子どもを中心として、それぞれの立場でどのように関わっていくかということの共通認識をもち、お互いに協力し合う姿勢を持つことが子どもの全人教育の一つの重要な鍵となると考える。

３　センター校での推進体制の確立

子どもたちが高い動機を持ちつつ母語教室に参加し続けるためには、各センター校の「学校としての取り組み」の中に母語教室が位置づけられる必要がある。教室は、現実には放課後や週末といった課外の時間に開かれることになるが、学校全体に周知された活動であるかどうかは、子どもの参加意欲に大きな影響を与える。

母語の教育によって、どう日本語の学習言語能力が伸びるかということや、どのようにアイデンティティが確立していくかということは、すぐに結果のわかることではないが、長い時間を費やす課題であるからこそ、学校全体での取り組みが必要であり、「開かれた教室」作りがなされるかどうかが非常に重要となってくる。

また、センター校は、その学校の中で母語教育の重要性の共通理解を図るだけでなく、近隣の学校に対しても働きかけていくことが大切である。具体的には、活動掲示板の設置や母語教室通信等の発行、在籍学級での学習や学校行事との関連を重視した取り組みや、日本人児童生徒に対しての発信等が有効な手段となるだろう。

4　全体計画・年間指導計画の作成

(1) 子どもの実態把握

母語教室に通ってくる子どもたちは、非常に多様性に富んでいる。学年(年齢)、渡日年齢、在日期間、また、家庭での言語環境等が個人によって全く異なる場合もある。それに伴って彼らの日本語力、母語力、学力にも当然のことながら差が見られるし、母国、母文化に対する知識量も同じではない。その多様な子どもたちを一斉に指導するのも母語教室運営の特徴の一つである。そのため、指導計画を立てる際には、子どもの実態把握が最も重要となってくる。実態を掴まなければ、指導目標を立てることもできないからである。その把握の際に注意が必要なのは、日本語と母語の二つのことばのレベルについてである。「ことばの力」と一言で言っても一人の子どもの読む、書く、聞く、話す技能の間にも大きな差が見られる。特に日本生まれや幼少期に来日した子どもの場合、中島(2003)で指摘されているように、聞く力が最も発達するが、聞く力に対して話す力が極度に低く、それよりさらに弱いのが読み書きである。また、仮に、話す力に着目した場合でも、自分の基本情報(名前、学年、誕生日など)を伝えることができるか、友達と遊ぶ約束をすることができるか、覚えている物語の再話（リテーリング）ができるか、ある事柄について自分の意見を根拠を示しながら述べることができるか、などといった力は、同じ指標で測られるものではない。読む力を例にとっても、文字の識別ができて流暢に音読ができるかどうかということと、内容についてどの程度前理解できるかということは別の力である。

このような力の把握は、例えばペーパー式の一つのテストを用いてなされるというものではなく、様々な角度から様々な方法で捉えられなければならない。周りにいる保護者、教師、日本語支援者、母語の指導者らの主観的評価も重要である。それに加え、いくつかのツールを用いて測定するという方法が考えられる。例えば、カナダ日本語教育振興会（2000）のバイリンガル会話テスト OBC（Oral Proficiency Assessment for Bilingual Children)、読解力の発達段階を測るテストである Beaver, J. (2001)、Beaver, J. & Carter, M. A. (2003) の DRA(Developmental Reading Assessment)、四技能・学年別の日本語習得上の特徴と、言語と認知発達上の諸特徴をレベル別に記述した川上(2006)の JSL バンドスケールのようなツールである。このような実態把握が行われ、その情報を共有し、初めて指導計画に取りかかることができる。

(2) 到達目標の設定

実態把握の次に行うべきことは、到達目標の設定である。学習言語能力を高めるために、そして、アイデンティティの確立のために、一年間、週１回２時間程度のクラスの中で、個人のどのような力を伸ばしたいのかということである。レベルの全く異なる三人の児童Ａ、Ｂ、Ｃが同じ教室にいたと仮定しよう。

児童Ａは、来日後１年の小学１年生で就学前教育を母国で受けていない児童である。母語の文字が導入される前に来日しているため、母語による読み書きは一切できない。母語での日常会話は保護者はだいたいできると言っているが、会話テストでは簡単な日本語単語が混ざる。物語の再生は、いくつかの出来事を単語か単文で表現できるのみで、主語や目的語など文の成分の脱落があったり、語句を思い出すのに時間がかかる。概念(時間や量･大きさなど)の獲得もまだ十分には進んでいない。日本語力については、日常会話はだいたい聞いてわかる程度になってはきているようだが、話す力は単語、もしくは「はい」か「いいえ」の応答のみで、読む力もひらがな、カタカナといくつかの既習漢字の識別はでき、一年生初中期レベルの物語を文節読みで音読することはできるが、それが内容理解につながっていない。

児童Ｂは、日本生まれの小学５年生で日本語の日常会話には全く問題がみられず、日本語母語児童と全く差がないほど流暢に話す。しかし読む力となると、漢字の習得が十

分でなく、学年レベルの教材文の音読・黙読に長い時間がかかり、内容理解も大まかな出来事を掴む程度に留まっている。行間に対する推論や作者のメッセージを捉えるまでには至っていない。家庭言語は母語であるが、母語の力については、聞く力はある程度保持しているが、話す力は語彙の制限により、極簡単な日常会話しかできない。読み書きも文字を習得していないため全くできず、母語の使用そのものに自信がなく抵抗を示す。

児童Ｃも小学５年生の児童であるが、来日後１年弱であり、読み書きの母語の力も学年レベルに近い状態で保持している。日本語力は、教師の指示や簡単な日常会話は理解できるようになってきており、限られた日常的な語彙と文型をつかって、単語や単文で応答することはできるが、読み書きは小学１年生中期レベルの教材文を読んで理解するのがやっとである。

この３人の伸ばすべき力は大きく異なっている。仮に、３人の到達目標をＡは母語の文字の獲得と起こった出来事を時間の流れに沿って把握できるようになるなどの認知面の発達とし、Ｂは母語の文字の獲得と同時に、母語を介した活動を通して達成感を得る機会をもつことで母語の使用や自分のルーツに自信を持つこと、そしてＣは保持している母語の力を利用して、日本語、そして日本語での教科学習がわかるようになることとしたとする。次の指導内容・方法の設定は、この一人一人の子どもの目標設定のもとに行うことが望まれる。

(3) 指導内容・方法の設定

上述のように、母語教室に参加する子どもたちの目標が全く異なる場合、特定の文法や言語事項の指導を中心に授業全体を組み立てることや、既存の教科書の内容を教え込むという方法は取りづらくなってくる。

そこで考えられる一案は、櫻井(2008)に挙げられているように、なんらかの作品（家族に宛てた手紙、国紹介ビデオ、自作絵本、劇など）を作り上げたり、子どもたちが自ら企画した行事(民族フェスティバル、母国の料理やお菓子作りなど)に向け準備する過程を通して、母語を使用する機会を持ち、母語・母文化についてそれぞれのレベルに応じて調べ、学ぶという方法である。教師が主導権をもち知識を伝達するだけではなく、子ども自身が中心となって、お互いに教え合い、学び合うことを促進する。教師はその活動を通して、それぞれの児童の目標とした力を伸ばすよう、サポートし導く。児童Ａにとっては友達と一緒に何かを作るという「生きた」活動が、認知力の発達につながるだろうし、Ｂにとっても、母文化について触れ、母語を通してなにかをやり遂げることができるという達成感が大切となってくるだろう。またＣにとっても、これらの活動は教科学習の中でも同じようなテーマで取り上げられているものなので、担任の教師と連絡を取り合い、教室との接点をもつことで、内容を介して母語と日本語をつなぐことができると考える。また、こうした活動は、レベルの異なる子どもたちが参加するということが逆にメリットとなる。日本語力が強い子どもは日本語を教える立場になれるし、母語力が強い子どもはそうではない子どもに母語を教えてあげることができるからである。そして、完成した作品や企画は、必ず、教室の「外」へ発信されなければならない。そうすることで母語を使用する世界を広げ、日本語での世界との接点をもつことが可能となる。

こういったプロジェクトを主体とする活動に加え、文字の習得やそのプロジェクトの中で使用される特定の言語事項の習得を目指した個別学習の時間を子どもたちの集中が続く範囲内(毎回 10～15 分程度)で設け、基礎力の定着を図るのもよいと思われる。

Cummins(2006)で挙げられている Identity Texts(アイデンティティ・テキスト)と呼ばれる、自伝的経験や家族・母国に対する想いなどと関連づけて子ども自身が作った絵本(物語)作成のプロジェクト(http://thornwood.peelschools.org/Dual/ 参照)は、上記の留意点についてよく考えられていて、参考にできる部分が多い。さらに作った作品は

Web サイトにアップされ、家族や友達が世界中のどこにいても見ることができるようになっている。

(4) 教材の選定・作成

先に述べたこととも重なるが、このような多様な子どもたちに対する教科書として、母国の教科書も日本にある外国語教材も適当であるとはいい難い。似通った実態の子どもたちが多い場合であれば、その子どもたちを対象とした教科書的なものを作成するというのは一案であろう。

そうでない場合は、指導内容を示した「教科書」ではなく、前述のような作品づくりや行事の企画などといった活動に必要な「リソース(資源)」を集めてくるといったほうが現実的であろう。語学学習の副教材だけではなく、あらゆるジャンルの本、写真や映像、実物、Web サイトなどである。冒頭に述べた筆者らが作成した教科書『Español Como Lengua Materna』は、(3)に挙げたプロジェクトを進めるためにレベルの様々な子どもたちのための作品例などを示した教材であり、これも一つのリソースといえる。また、人のネットワークも重要な人的リソースとなりうる。とはいえ、母語で書かれた本や母文化に関わる情報の少ない日本で母語・母文化に関するリソースの収集は簡単ではないため、少しずつ、そしてあらゆる機会を活用して収集に努めることが望ましい。また、上述のアイデンティティ・テキストのように子どもたちが作った作品を Web サイトに保管・共有しておくことによって、その作品そのものが他の子どもたちの活動のリソースとしても活用できる。

(5) 取り組みの評価と改善

年間計画は、子どもたちの様子を見ながら、その都度修正されていくことになるであろうが、年度の最終段階では、やはり一年間を通しての取り組みの評価が必要である。その際、取り組み開始時に得た子どもたちのことばの力にどのような変化があったのかを検討することが一つの有効な取り組み評価につながるだろう。また、取り組み開始時と終了時のことばの力の評価に加え、年間を通して作成した作品や、その準備のために書き残したメモなどを集めたポートフォリオを作成し、それをもとに子どもたちがどのようなことができるようになったのかという点を評価することも可能である。そして、その評価を次年度の取り組みの改善につなげていくことが望まれる。

4　まとめ

以上、母語教室を運営するにあたって、一般的に留意すべき点を述べてきた。ただ、実際に筆者が母語教育や外国人児童生徒の支援に携わって一番に感じるのは、母語と日本語の二つのことばの育成は、一朝一夕に成るものではなく、その子どもが成人するまでの長いスパンで考えなければならないということである。二つのことばが比例して伸びていくというものではないし、ある時点では母語のほうが強かったものが、別の時点では逆転しているということも常である。こうした時間と空間の連続性の中で子どものことばの発達を見守りつつ、目の前の一瞬一瞬に全力で取り組む姿勢が必要だと考える。日々の一歩一歩の取り組みが、子どもの健やかな成長につながることを願ってやまない。

引用文献

カナダ日本語教育振興会（2000)『子どもの会話力の見方と評価―バイリンガル会話テスト(OBC)の開発―』カナダ日本語教育振興会

カミンズ、J.／ M.ダネシ著　中島和子／高垣俊之訳（2005)『カナダの継承語教育　-多文化・多言語主義をめざして-』明石書店

川上郁雄（2006)「年少者日本語教育学の研究主題と方法」宮崎里司編『早稲田から世界へ発信―新時代の日本語教育をめざして―』pp.49-68 明治書院

櫻井千穂（2008)「国内小中学生の母語支援教育‐兵庫県スペイン語グループの取り組み‐」

母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究会 2008 年度大会予稿集 pp.21-27
中島和子 (2003)「JHL の枠組みと課題―JSL/JFL とどう違うか―」第 1 回母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究会議事録
http://www.mhb.jp/2003/08/(2009 年 03 月 14 日取得)
Beaver, J. (2001) *Developmental Reading Assessment. K-3 Teacher Resource Guide.* Parsippany, NJ : Celebration Press.
Beaver, J. & Carter, M. A. (2003) *Developmental Reading Assessment. Grades 4-8.* Parsippany, NJ : Celebration Press.
Cummins, J (2006) Identity Texts: The Imaginative Construction of Self through Multiliteracies Pedagogy, *Imagining Multilingual Schools : Language in Education and Glocalization,* 51-68.Clevedon, England: Multilingual Matters.

引用 URL
Thornwood Elementary School in the Peel District School Board, Canada
http://thornwood.peelschools.org/Dual/ (2009 年 03 月 12 日取得)

平成２０年度 新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実施要項

１　趣　旨

母語を思考基盤とする新渡日の外国人児童生徒に対し、学習言語の習得を支援するため、当該児童生徒が多数在籍している小・中学校に母語の指導ができる者を派遣する。

また、母語・母文化にふれる様々な体験をとおして、当該児童生徒のアイデンティティの確立を支援する。

２　実施期間

平成２０年４月１日から平成２１年３月３１日まで

３　実施内容

(1) 母語教育支援推進委員会

ア　県教育委員会は、本事業を実施するため、市町教育委員会が設置する母語教育支援推進委員会（以下「推進委員会」という。）に当該業務を委託する。ただし、委託期間は委託を受けた日から平成２１年３月３１日までとする。

イ　市町教育委員会は、推進委員会の設置に際し、委員長及び委員を定め、本事業が組織的、計画的に実施されるよう努めなければならない。

ウ　推進委員会は、市町教育委員会の職員、小・中学校の教職員、保護者及び国際交流協会・ＮＧＯ／ＮＰＯ等関係機関・団体の関係者等により組織する。

エ　推進委員会は、母語教育支援センター校（以下「センター校」という。）に母語の指導ができる者を配置する。

(2) センター校

ア　県教育委員会は、母語を思考基盤とする新渡日の外国人児童生徒が多数在籍している小・中学校をセンター校に指定する。

イ　センター校は、校内に母語教室運営委員会を設置し、当該児童生徒に日本語習得の基礎となる母語の指導及び母文化についての理解を深める教育を行う。

ウ　センター校は、県教育委員会に資料の提供や研究成果を報告する。

４　事務手続

(1) 推進委員会は、年度当初に実施計画書（様式１）、推進委員会委員名簿（様式２）、収支予算書（様式３）、中間期に中間報告書（様式４）、事業の終了時に実施報告書（様式５）、収支精算書（様式６）を、それぞれ県教育委員会に提出する。

また、県教育委員会の求めに応じ、随時資料を提供する。

なお、報告書等に関する著作権は、県教育委員会に帰属する。

(2) 推進委員会は、センター校の校長及び母語の指導者に変更が生じた場合には、速やかにその名前及び理由を県教育委員会に報告する。

５　その他

(1) 母語教育支援センター校等連絡会

県教育委員会は、母語教育支援センター校等連絡会を必要に応じて開催し、成果と課題の情報収集、意見交換などを行い、センター校間の連携を図るとともに、今後の外国人児童生徒の支援施策に資する。

(2) 事業経費等

県教育委員会は、予算の範囲内において、推進委員会との間に業務委託契約を締結し、当該事業に必要な経費の全部または一部を支出する。

(3) その他

この要項に定めるもののほか、事業の実施に必要な事項は県教育委員会が別に定める。

平成20年度母語教育支援センター校一覧

NO.	事務所	市町名	学 校 名	言語名
1	神戸	神戸市	本庄小学校	スペイン語
2			こうべ小学校	中国語
3			港島小学校	中国語
4			御蔵小学校	ベトナム語
5			真陽小学校	ベトナム語
6			神陵台小学校	中国語
7			本山第二小学校	フィリピノ語
8	阪神南	尼崎市	園田北小学校	ベトナム語
9		西宮市	神原小学校	インドネシア語
10		芦屋市	潮見小学校	スペイン語
11	阪神北	伊丹市	花里小学校	韓国･朝鮮語
12	北播磨	小野市	河合小学校	ポルトガル語
13	中播磨	姫路市	花田小学校	ベトナム語
14			城東小学校	ベトナム語
15			東小学校	ベトナム語
16			花田中学校	ベトナム語
17			東光中学校	ベトナム語

平成 20 年度
新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業
実践報告書

平成 21 年(2009 年) 3 月発行

発　行　母語教育支援センター校等連絡会
連絡先　兵庫県教育委員会事務局人権教育課